

行 動 記 録 用 紙

1978 年 1 月 日 天 候 雪

報告者 山 本

参加者氏名 リーダー 豆田 大座 幸 今井 川野 山本

本日の行動
概要並びに
目的 サポートメンバーの猫又山アタック

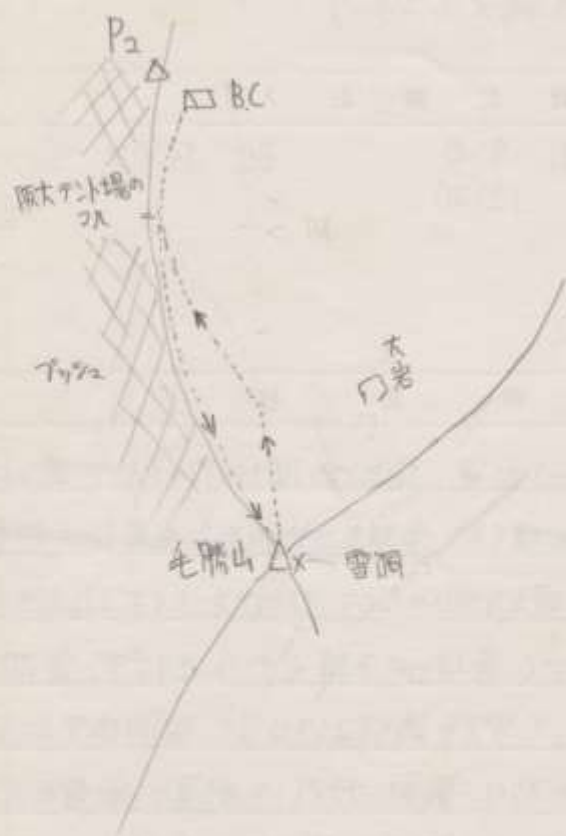
時 間 記 録 記 入

BC 7:35 毛勝山 9:10 BC 13:05
12:20

行 動 記 録

ガスがうくなるのを待ってアタック出発。腰ほどの深さのラッセルで思うより大
進むことができない。ほとんど雪に埋もれた斜面をさかきながら毛勝山の斜面を
登る。途中 クラストした所が現れおぼえのためワザをアイゼンにはきかえる。
毛勝山についたときガスがひどく南峰への下降点が見えせず、雪洞を
掘って荷機。いつまで待ってもガスが晴れるおぼえなく雪洞内アレーション
を食って下山。毛勝山からの下りは最初 クラストした斜面に新雪が10cm
ほど積って歩きにくい。下るとなると新雪が深くなる。直径3~4mmほどの
雪の結晶が7の字まわっていくのはおどろく。雪は非常に不安定で
足元がすぐ折れていく。何とか無事に斜面を下りきり BCへ。

ル ー ト 図



ル ー ト 解 説

登りのルートは尾根を先登
に登り、よかつたと思われる。
左の主稜線側の斜面は
大岩が見える。
下りはルートを右にとりすそ
下りの危険性が大きくなる。

雪洞は毛勝山山頂の
東南下の吹きかたなり。
4〜5人か横になれる
大きさ。

備 考

行 動 記 録 用 紙

年 月 日 天 候

報告者 川 野

参加者氏名	リーダー CL 藪内(3) SL 川口(4) 宮田(2) 川野(2)
本日の行動概要並びに目的	

時 間 記 録 記 入

行 動 記 録

28 FRI ①→②

富山で定着隊と別れ、市へ行く。これから、タクシーで馬場島に向うが、今年は積雪が多い為、^氷にから2時間程前的大熊谷出合で降りられる。所々雪が残っている車道を剣先を見ながらのんびり行くと馬場島に到着。登山届と黙祷後、アツクラ谷出合目指して出発。トスが付いている出合からは雪をやすむ場所を登山で進み、最初の砂防は階段を使わずに簡単に越えられたが、2つ目は雪の付着方が更に苦労する。これを過ぎると回りかしのテマリが多くなり時々足を取られる。高度が増えつれ傾斜も急になり、保道りまで来ると、いよいよ急登になる。左俣をとる。ストックスツアで一歩一歩慎重に登り、氷直下では左のカレ場に入るが、落石が多く再び雪渓にもとまる。ドラドラで氷に到着。この辺り黒部側によく発達した雪尻がある。

Time 大熊谷(9:55) - 馬場島(9:20) - アツクラ谷出合(10:35) - アツクラの氷(4:20)

29 SAT ③→④

小雨だが出発する。氷から氷に登り、古いトスがある。雪尻は黒部側に非常に発達していて、Bush kmの境界を登山して、赤谷山直下では崖根が発達せ、底雪田になっている。雪はすうた

所を登入で登る。傾斜が次第に増し、場所によっては、雪壁も出てくる。ひたこりPeakに届く。ここまですくもT.Sに良い場所があった。このPeakは広いので、カスの時迷うかも知れない。その傷か赤旗がたぐん立っている。今日は風雪も激しくなりここにTentを張る。

Time T.S (6:10) - 赤谷山Peak (9:00)

30 SUN ● → ①

昨日、赤谷尾根から来た人が先行し、そのトースに往う。T.Sから小さなコブを2~3ヶ所越えて、白萩山に到着。赤人ヶから、やせ尾根になつて、赤人ヶの次の小Peakとの間のColは、ナイリッジのトラバースで亀裂も走っていて緊張する。この辺りは、雪庇が非常に発達で、白人ヶ雪で、小さい岩峰が2つあり、最初にものを巻くのに時間と合う。大寒への下りは、主尾根自身に、大きな雪庇が発達していて、進めないで、北西にのびる支尾根をくだり、主尾根に向いてトラバースする。

そのあと、クラングタウン、安定した所から40mのケスで、ルセに降り立つ。こゝを下り大寒に到着。大寒の頭へは、雪が完全に消えて、踏跡がぬけて、浮石に足をつけてながら、ハチ松をもち登るとてもたふし急登だ。Peakから、かしたると小岩峰が現れ、慎重に巻を巻く。この岩峰には、たぐんフックスがある。このあと、池平山Peakまでは、ルセ状の雪壁と、あそびながら登る。Peakからは、やせ尾根になつて、それを下る。1ヶ所ナイリッジがある。Colまで40m一杯のケスである。

Time 起床 (3:40) - T.S (5:40) - 白萩山 (6:10) - 赤人ヶ肩 (6:30)

赤人ヶPeak (9:20) - 白人ヶ (8:45) - 大寒 (10:55) - 大寒頭 (1:30)

池平山 (2:30) - Col (3:30)

1. MON ①

Colからすぐ目の前のルセ状の雪壁に登る。アセシが以利く、とても足が見え目よりよい。フックスがハタ張りである。しかし、上部雪が消えて浮石が多く、不安定で緊張する。尾根からは、雪庇がぬけて、黒部側に行く。所々道がある。2ヶ所程クラングタウンがある。小寒への下りは、上部が雪で、下部は、岩がある。フックスハチ松張り。それに、フルーシクをとり慎重にクラングタウンで下る。シエリする。小寒からは、トースのは、かした、足な登りで、フックスアアと行く。雪がぬけて、登り、門々もなる。1Pで小寒2650の22に到着。ここからは、やせ尾根の見登で、ハチ松をもち登り、ゆた登る。雪がぬけて、切り落ち、尾根の雪壁がく見え、小寒へのトラバースは、はだ、フックスアで、3~40m下り、そのあと下見時にトラバースする。雪はよく凍っているが、所々ぬける所があり、ハチ松が利かす味浪するが、長いので、ハチ松で、三見に到着。ここには、たぐんTentが張れて、3ヶ所、支尾根のため池平のColへ行く。足で下る。

Time T.S (6:20) - 小寒 (9:15) - 小寒2650 Col (10:20) - 小寒の頭前 (11:25) - 三見 (12:25)

行 動 記 録 用 紙

・ 年 月 日 天 候

報告者

参加者氏名 リーダー

本日の行動
概要並びに
目的

時 間 記 録 記 入

行 動 記 録

2 TUE ②→⑧

池ノ谷ガリーをキクスタアで登りcolにある所々、シルがたまっている。そこから、ルンゼ状の雪田を少し登り、ナワリ山のやせ尾根へ出る。しばらくこれを行くと、長次郎のcolに到着。ここから、足な雪壁をあらえながら登る。トスガは、歩いて登りやれ。このあと、しばらく行くと到着Peakに。足が残ったが、ガスで視界が利かない。黙静待下る。カニの横入り、縦入を慎重に下り終えた後、本峰Attack隊と出会う。別に問題のない尾根を下っていくと、足な前側の下りに差し掛かり、トスガと合流する。避難小屋を過ぎ

慎重に降る。このあと、G1 Attack 隊と出会う。B.まで先付けもらう。

Time 起床(4:00) - T.S(7:00) - 池ノ谷のcol(7:40) - 長次郎のcol(8:30) - 本峰(9:10)

B.C(13:05)

計算機用紙

第 1 頁

第 1 頁

第 1 頁

第 1 頁

ル ー ト 図	ル ー ト 解 説
（ここに図を記入する）	（ここに解説を記入する）
備 考	（ここに備考を記入する）

行動記録用紙

53 年 5 月 / 日 天候 ①

報告者 今井

参加者氏名 リーダー 住友 今井

本日の行動
概要並びに
目的

東大谷 中尾根

時間記録記入

5:00 B.C. 巻 - 5:30 取付下降 - 7:50 中俣本谷出合
10:50 430m 直下、しーしょ (11-101) - 4:40 ミニ峠西下
6:05 ミニ峠 - 6:20 剣本峰 - 6:40 長坂部コル
9:00 B.C. 着

行動記録

成前コルの昨日調べた下降点から40m懸垂で中の右俣におりる。40mコンテ
300mスワットをして又コンテで中俣本谷との出合につく。中の右俣は雪かきした事もおきてい
ないので思ったほど悪くなく、落石も少なかった。

中俣本谷は富高ルンセをこなしながら登る。本谷の状態はさうよいものであった富高ルン
セの入口の境は露出していなかったものの、かなりきれており支尾根を乗り越すことには本谷を
登る。

クサクサの雪の支尾根を乗り越してまわったルンセは非常に長く、かなりの中をもつてお
り傾斜もきつ、そして絶えず両側からなたれており、そのため氷で上まわぬけで疲れた。

トンラへの取付のナイフリッジはクサクサの雪でステップをきることか困難であ
た。岩峰そのものは外傾したホロホロの岩で、フッシュは全くあてにならず時間をくった。
雪の状態がよければ、すぐ下の雪渓をトラバースして取付けは容易であろう。

トンラからは又、ホロホロのナイフリッジをかせ行き、フィックスのある岩盤に出る。ここから
はわりと簡単にシシ頭に出る。早月のトレースを見た時はホーとした。peakでもくとう後、長次
郎谷をシシコで下り、真暗な剣沢をフラフラにたて登り、疲れきったB.C.に入る。

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説



備 考

中尾根は新倉から非常にわかりにくい。
平蔵の川からオタマキ川でかよく見える

行 動 記 録 用 紙

1978 年 5 月 1 日

天 候 晴

報告者 山本 忠昭

参加者氏名	リーダー 栗 山 本
本日の行動概要並びに目的	ハッ峰 I 峰 4 峰 アタック
時 間 記 録 記 入	
4:30 BC	5:45 南腹 10:20 P ₃ 11:30 P ₃ の上
16:15 I 峰	17:10 I, II 峰間の上 18:05 I-II 峰間の上 20:00 BC
行 動 記 録	
4 峰 41R 側支線の末端はブッシュが下っているため、テグリのつた 41R 側 1 箇所につまみ 45 4 峰に上りつく。最初、快雪な雪降りで足元を上げて、いかに 41R 側 上るが、強引にブッシュをこぎ、再び雪降る。雪がくさくさい非常に不安定である。 P₃ 直下 初めのふかたなアイスエッジに行くことはなされる。不安定な雪降りでアイスエ ジ、スリットで三穴側の 30m 下り、急な斜面をトラバースしている。靴の足跡を見つ づけた。足元が雪降っており、足味が悪い。上下はアタックが今にも落ち 来ている。P₃ 頂上から上っているアイスエッジに上りつき P₃ へ。P₃ が 5m ほど やせたアイスエッジを下った所がキリ雪となり、そのまゝ下降することは不可能。 41R 側へ 10m 下りつづける。三穴側の雪壁を 10m クラッシュダウン。太い 氷柱の木のガイルを 20m 懸垂下降。再び 10m クラッシュダウンして谷に 降り、上りかき登る。上りかきガイルをはずして、アタックが今にも落ち 正面の雪壁を 20m 登る。後続は出た。またやせたアイスエッジ。慎重に登ると 先峰 P₂ に行くことはなされる。41R 側をトラバースし、ガールをついて後続へ出る。	

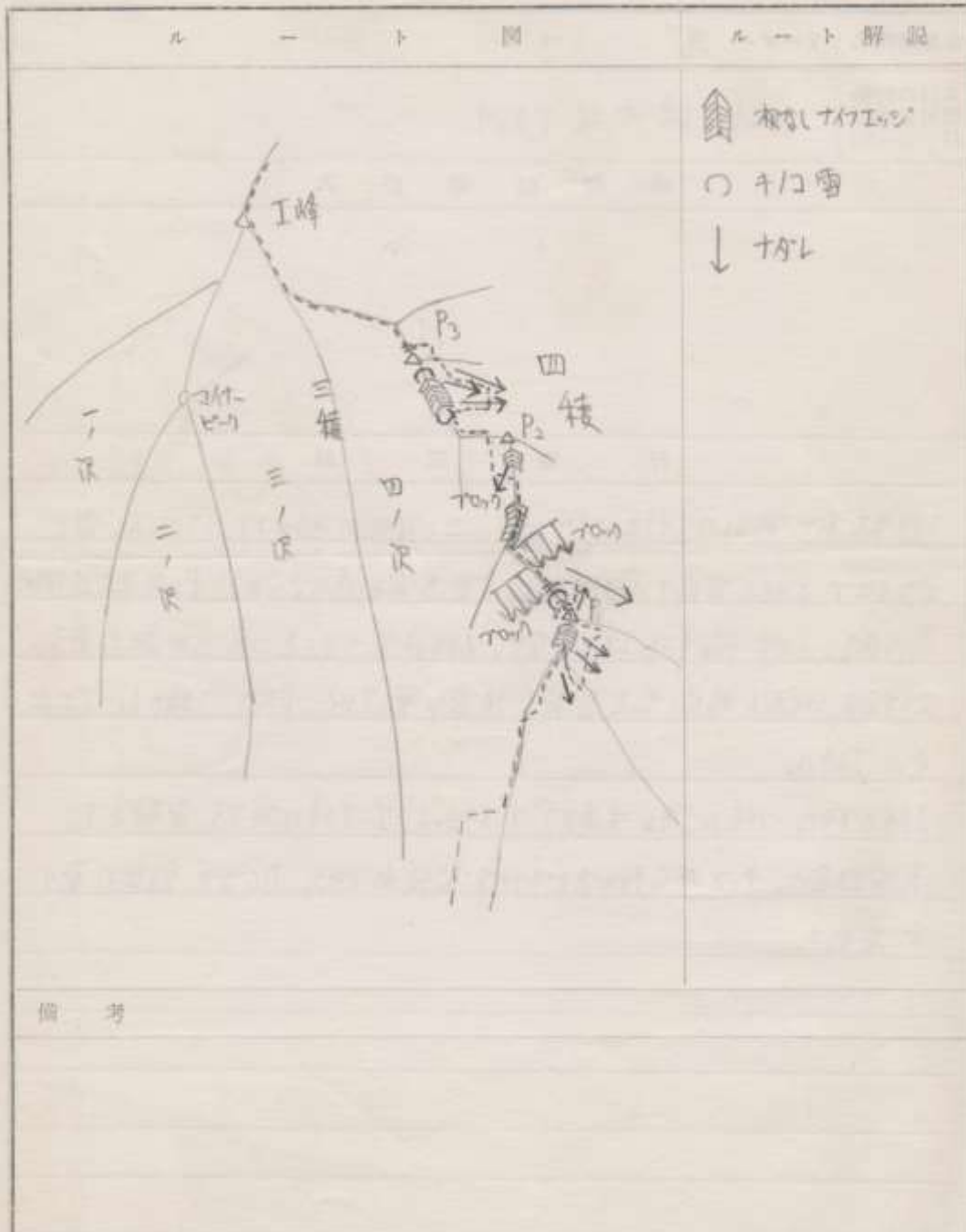
ル ー ト 図	ル ー ト 解 説
	主な岩峰をこの紙面 にのみ、仮に上部 から P_1, P_2, P_3 と 呼ぶことにする。 これは正式な名称で はない。また岩峰とい うのはこの所雪期に よって見えたはず無 雪期には等しいヤブの ピークがいくつかない。
備 考	

行動記錄用紙

1998 年 5 月 1 日 天候 晴

報告者 山本克昭

参加者氏名	リーダー 事 山本
本日の行動概要並びに目的	ハッ峰 I 峰 4 稜 T タツ
時 間 記 録 記 入	
いけきた 氷の根のナイエッジにつまる。三ノ宮側の 30m 下り、トランス。雪が ぐにぐすとどろどろ雪崩して、比較的安全な谷を急いで下り、P₁の三ノ宮側の 肩へ出る。ここ 40m ぐらい 2 本をつなぎ、スリットでガリをきり、P₁の氷谷へ出る。 ここからは いくぶん幅広くなった雪道を快適に登っていく。やがて、3 本のトランスと出 会い I 峰へ。 I 峰の下りはつかりすぎたため、大断をとりスリット。I・II 峰の氷谷から雪壁を下り 長次郎谷へ。やと平な所がたどりつかない緊張がとれる。BC まで 剣沢の登り が長かった。	



行 動 記 録 用 紙

53年 5 月 2 日

天 候 ②→④

報告者 今井

参加者氏名 リーダー 豆田 今井

本日の行動
概要並びに
目的

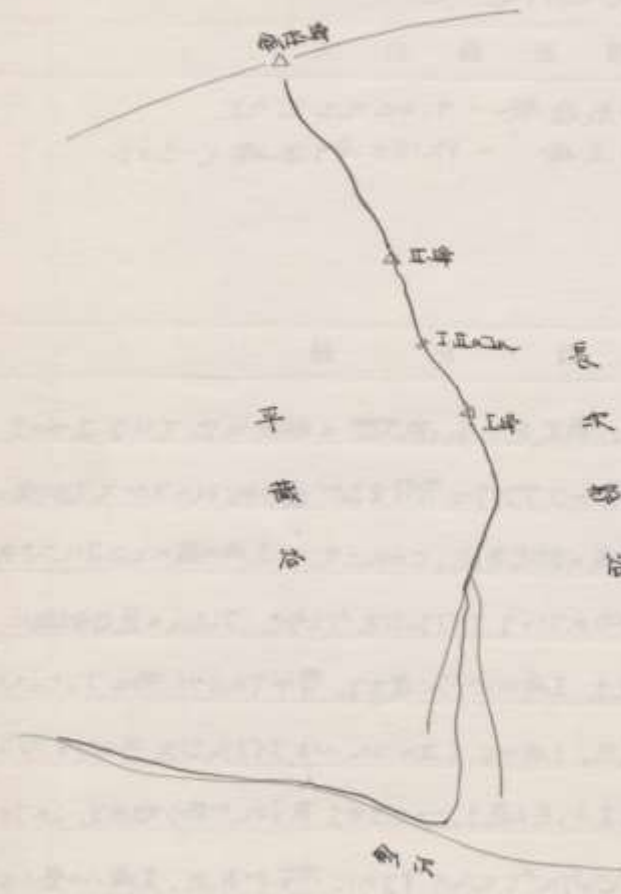
源 尔 郎 尾 根

時 間 記 録 記 入

7:20 B.C.巻 - 8:00 出合巻 - 9:00 ルンゴの上
10:10 I 峰 - 11:20 II 峰 - 12:30 利本峰レショ
2:05 B.C.着

行 動 記 録

紐通れをりて、出巻が通れる。斜面を下り、源尔郎の斜面に出ている2つの支
尾根の間にたてつかれる。下巻は雪がクワツテ苦行するが途中からトースかてお楽に
なった。雪は安定していたが、雪崩の跡があった。このしこでな I 峰の肩のところにつきあ
けている。ここから ^平 越蔵谷側に切れているアイワリシとウイキ、ア・シユの急な斜面に
取り付く。ア・シユの後は雪壁が続き I 峰のピークに達する。雪がやめらるが、特にア・シユの
境目あたりで、もぐてはい苦行した。I 峰から II 峰の谷へはアイワリシを3ピッチスリッ
て下る。しかし、ここは2ピッチでもよから、Eと思う。このころからあられが降り始める。このア
ワリシは雪がやわらかから、Eので、ピッチルでビレイするのに不安があった。II 峰への登りは
I 峰への登りによく似ており、最初ア・シユをつかんで登り、その後雪壁続き、II 峰のピー
ク周辺はアイワリシとなっている。このあたりは高度感もあり慎重になる。II 峰からは、クワリ
大きなクワのピンを利用して懸垂下降25mでコルに立つ。ここでスリッが氷、ていること
を考えると、クワのピンを1つ時間をつくってほう。ここから安定した雪壁を1ピッチ登り、
本峰のピークに着く。ここでレショで食べ、さらに1ピッチで界山尾根を下りB.C.に着く。

ル ー ト 図	ル ー ト 解 説
	
新 正 崎	

行動記録用紙

53年 5月 2日

天候

曇り吹雪

報告者

青木雅夫

参加者氏名	リーダー 志谷 要 佐々木 西岡 青木
本日の行動概要並びに目的	剣本峰アタック
時間記録記入	
ベース 午前 7:35 出発	ベース 3:00 着
平蔵 避難小屋 9:15	
剣 10:15	
長次郎谷 午後 1:30	
行動記録	
7:35 ベースを出发。天候は曇り。前剣に入り傾斜が 急つく。キックステップを十分行なうように掛ける。 9:15 平蔵の避難小屋に着く。この間 2ピッチ。 この頃から吹雪は激めた。間もなく岩場で縦走隊 と出会う。かたの横ばいを慎重に通り抜ける。 10:15 剣のセーフに立つ。あいにくの天候で 視界が非常に悪い。 帰りはパイルを使い クライミング ダウン。一歩一歩慎重 に降りこむ。アイゼンをつけ、しりぞで長次郎谷を下る。 ハッ峰を左手に見ながら 1:30 に下で降りた。 ベースまでの上りは 2ピッチかかり 3:00 ベースに 着く。 天候が悪化を繰り返す。地を踏めてよかったと思う。	

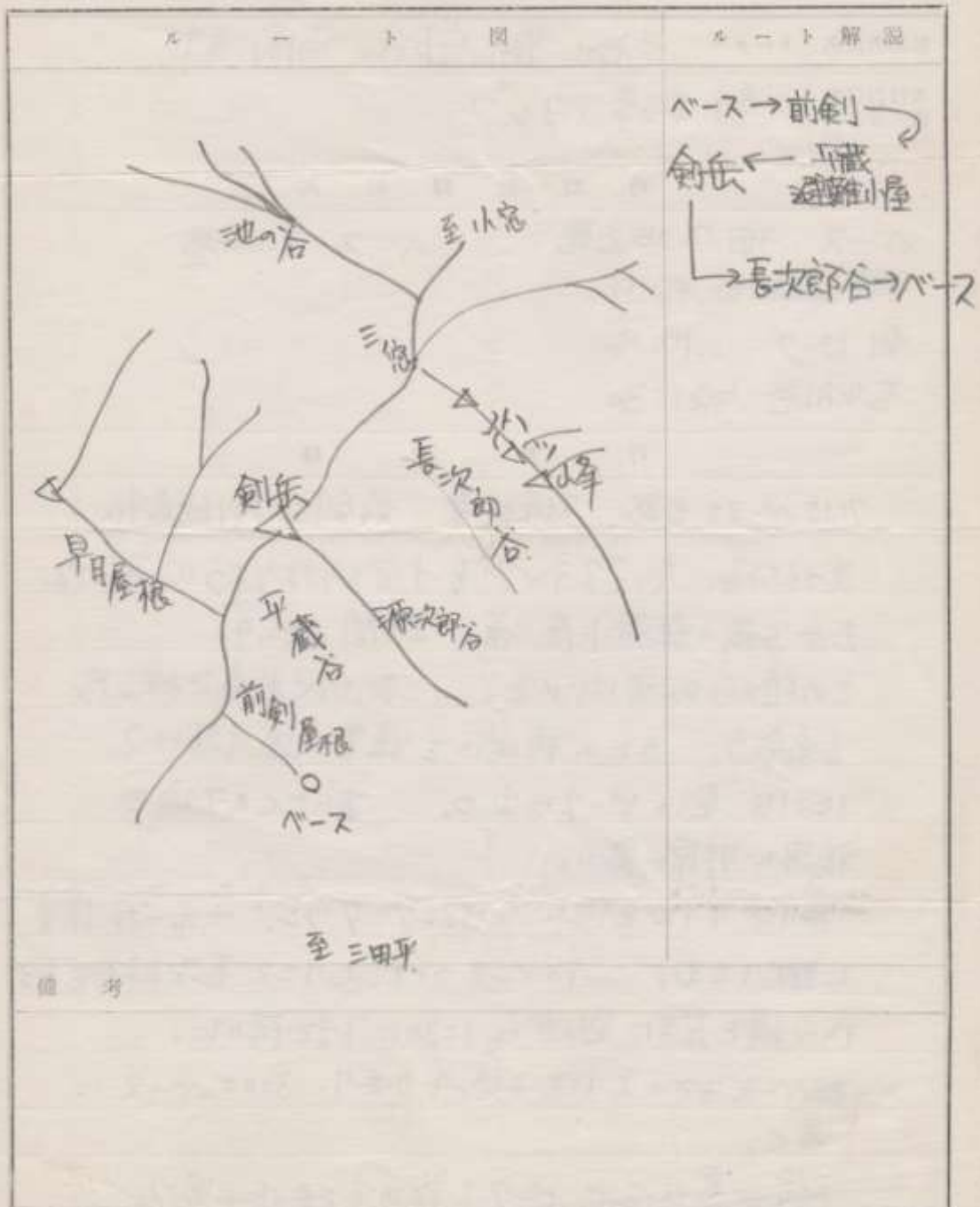
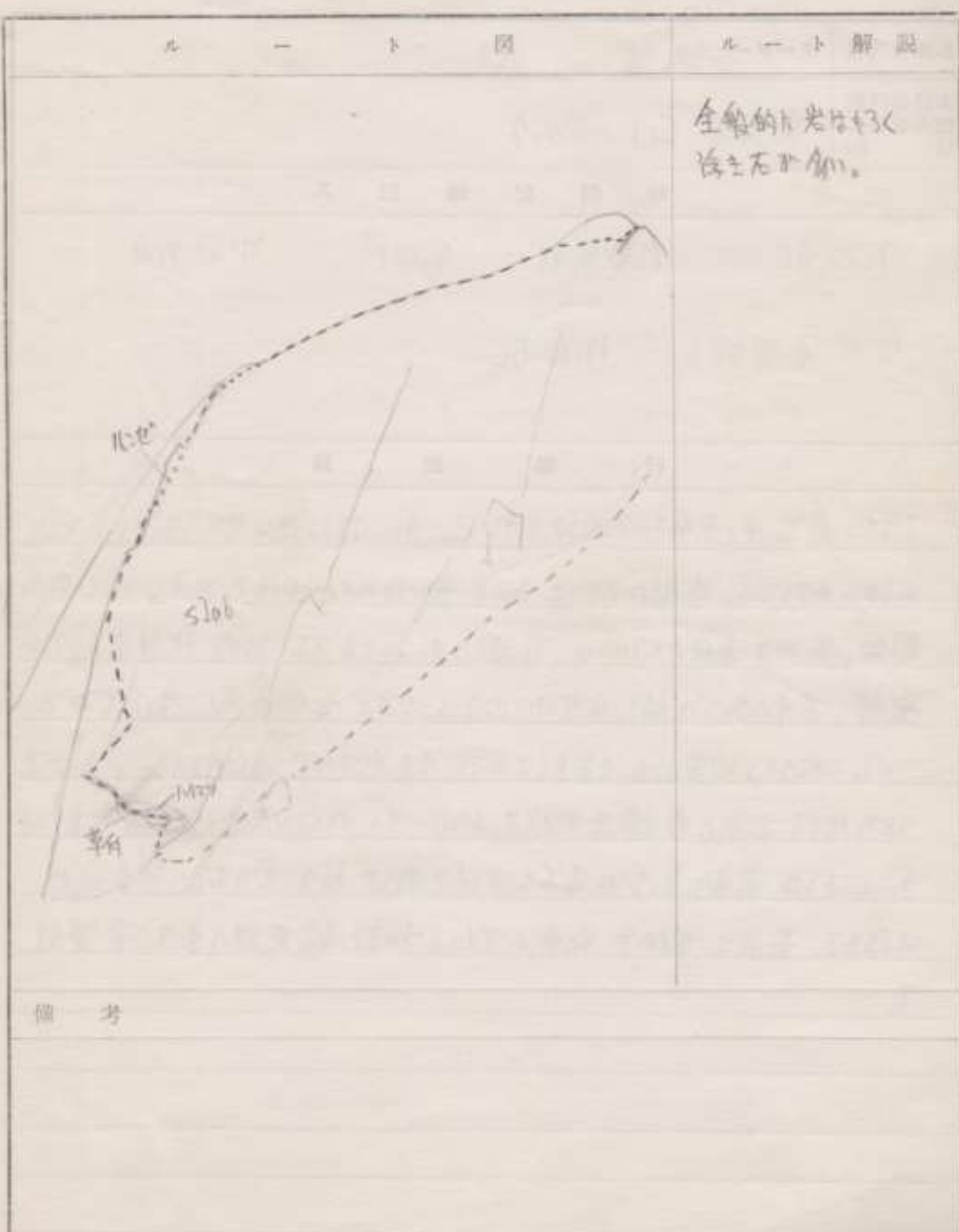


圖 一 九

說 明 一 九



全船の大きさは3<
海主石が11。

備 考

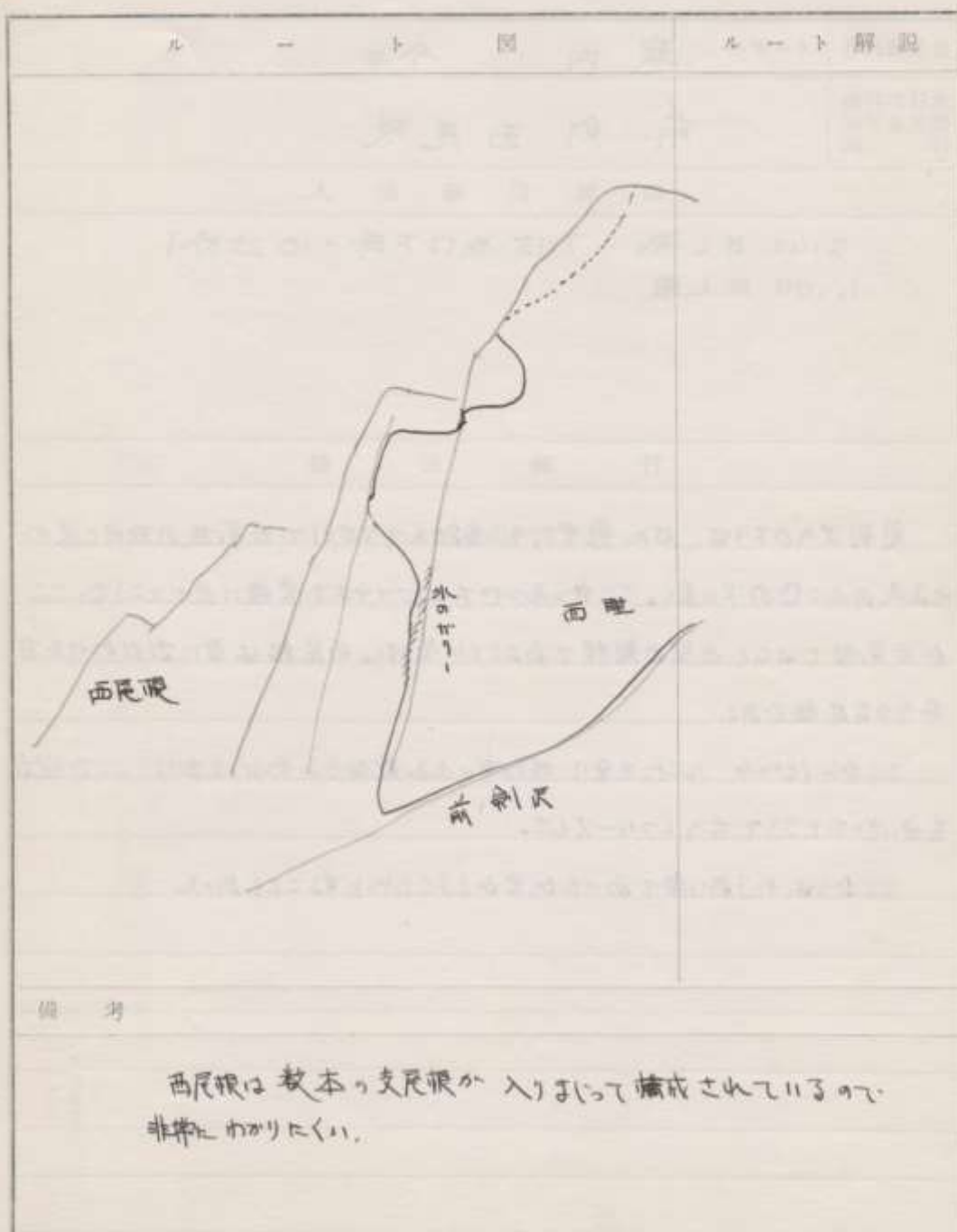
行動記録用紙

53年 5月3日

天候 ①

報告者 今井

参加者氏名	リーダー 萩内 今井
本日の行動概要並びに目的	前 剣 西尾根
時 間 記 録 記 入	
5:40 B.C.発 - 7:15 取付下降 - 10:25 終 11:00 B.C.着	
行 動 記 録	
前剣沢への下りは、けし懸垂で、その後80mスリカットで西尾根の取付と思われる氷のランセの下に着く。ここからランセを2ピッチ半で岩稜に出たところでは、ここが西尾根ではなく、西壁の割枝であることに気付く。西尾根は雪におおわれた容易そうな尾根である。 ここから1ピッチランセを登り、核心部に出る。最初ケシかいらってあり、ここで腕力を使い果たしたところで右へトラバースした。 ここからは、わりあい楽であったが、岩がむくむくしやとすることもあった。	



行 動 記 録 用 紙

553年 5月 3日

天 候 ○

報告者 川 野

参加者氏名 リーダー 川口(4) 川野(2)

本日の行動
概要並びに
目的 ハッ峰 1峰 三稜 Attack

時 間 記 録 記 入

B.C (5:15) - 三沢出合 (5:50) - 三稜取付 (6:50) - P₁ (9:05)
1峰 Peak (11:25) - 長次郎谷出合 (12:30) - B.C (14:00)

行 動 記 録

B.C からアヘンと登攀具を付け剣沢を下り、まもなく三沢出合に着く。稜沢山荘は完全に雪で埋まっている。出合付近は、ラッリガー一杯あり雪崩の物凄い物語っている。一時間程沢を遡り、登りやすい雪壁を見つけそこから取付。対岸には、殆ど雪で埋ったMピク乗面スラブがよく見え、今にもプロクが落ちそう。1P目は、階段状の草付で Bushと雪が混り、それらが良く締まってアヘン、ピッケル、アイスハンマーを利かしながら、ジクザクに登るが見た目よりは、難しい。2P目は、Bushの中の登攀で、雪の重みで下のうへ曲り、生えている木が邪魔でとても登りにくい。大いハントへの出口付近が難しく、Bushとつらの根元を持ち慎重に切り抜ける。3P目は、5m程、最初トラバースして、雪壁に出るが、雪壁とハントの間に、氷大岩壁があり、これを越すのが苦勞する。ハンマーとアヘンをよく利かし、思い切りよく抜ける。そのあと、木々の間を抜けて雪壁を登るが、難しくなかなか前へ進まない。20m程、登った所で、上部がかさなり、気なので、直登を避け、左の大木を目指して、10mトラバースしてピレを取る。ダブルアックスが有効だ。4P目は、雪壁の直登で、ダブルアックスで快適に登り、稜線

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説

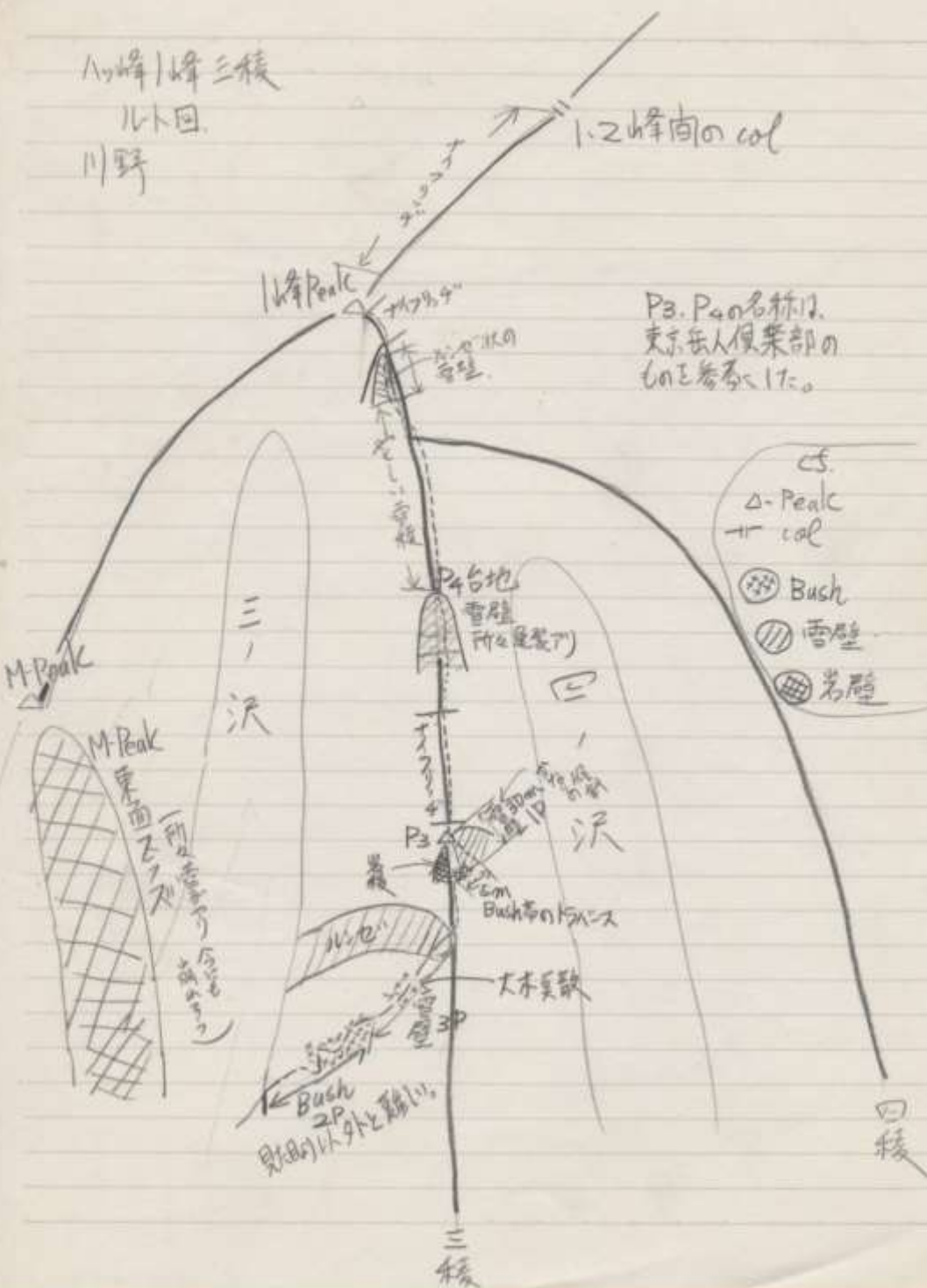
に飛び込む。ここで他のPartyと出会う。ここからは、田後から、田沢へ落ちるブ
ロックや、石が、無気味な音となって向にえる。これから、上部は、先行Partyのヒスに
従う。すぐにやせ尾根になり、雪が崩れ、亀裂が至る所に入っていて見るからに不安定
そうなナイフリッジに出会う。一部、岩とBushが露出している。岩には、バーゲンがほ
ある。この岩は、上部の雪がかぶっていて登れないので、田沢へ下り、ナイフリ
に向て、雪壁を登る。雪が、緩んで、所々もぐり、^{ここを越え}、このナイフリッジを行き、
すぐ目の前に見えるトームの登りにかかる。下から見ると、亀裂も入り、物凄い雪壁だ
が、取付いてみると、以外にやい。核心部は、ここまでとみえて、これから先、
1峰Peak直下までやい、雪後が続く。田後と合流する所りからは、ル
ンセルの雪壁を30程登り、Peakに続くナイフリッジに出る。出口付近が、
1人松を掴んでの腕力登攀となり、うしろする。Peakでは、三沢を告、来た
Partyと出会う。Tentを張、た跡で、レインと交信を済ませ、1、2峰間の
Col.目掛けて、やせ尾根を下る。Col.からは、ルンセルをクレバトで下降し、R.C.
にもとる。

備 考

八ヶ峰1峰三稜
ルト回
川野

1.2峰間のcol

P3, P4の名称は、
東京山人倶楽部の
ものに参考した。



行 動 記 録 用 紙

53 年 5 月 3 日

天 候 ①

報告者 宮田

参加者氏名	リーダー 庄友健時 宮田 典義
本日の行動 概要並びに 目的	前剣 東尾根
時 間 記 録 記 入	
7:40 8:00 ベース発. 8:00 取着. 15:50 終了 4:10 ベース着	
行 動 記 録	
及びから剣沢を下って取着さに着く。末端(右尾根)の中矢ル ンセはかなり厚がしまっていてノビッチ。コンテで行く。夕ピッチ目 で稜線に出てしまう。稜線に出たところには武蔵からルンセ(アル ンセ)があり。このルンセを利用すると2〜3ピッチで稜線に出られ ると思った。稜線上部は頭着な3つのピークから成っており岩場など はハイ松が出ておりベテに肉付きはなかつた。各ピークの下りはナイフリッ グになっておりこのナイフリッジの通過はスタックカットでやりぬけたが思 ったより時間がかかった。最後のナイフリッジを終えると前剣ピーク 200m手前にはコルがあり。ここでザイルをばってピークへ。ピ ークからは別山尾根からベースへ。	

ル

一

ト

図

ル

一

ト

解 説



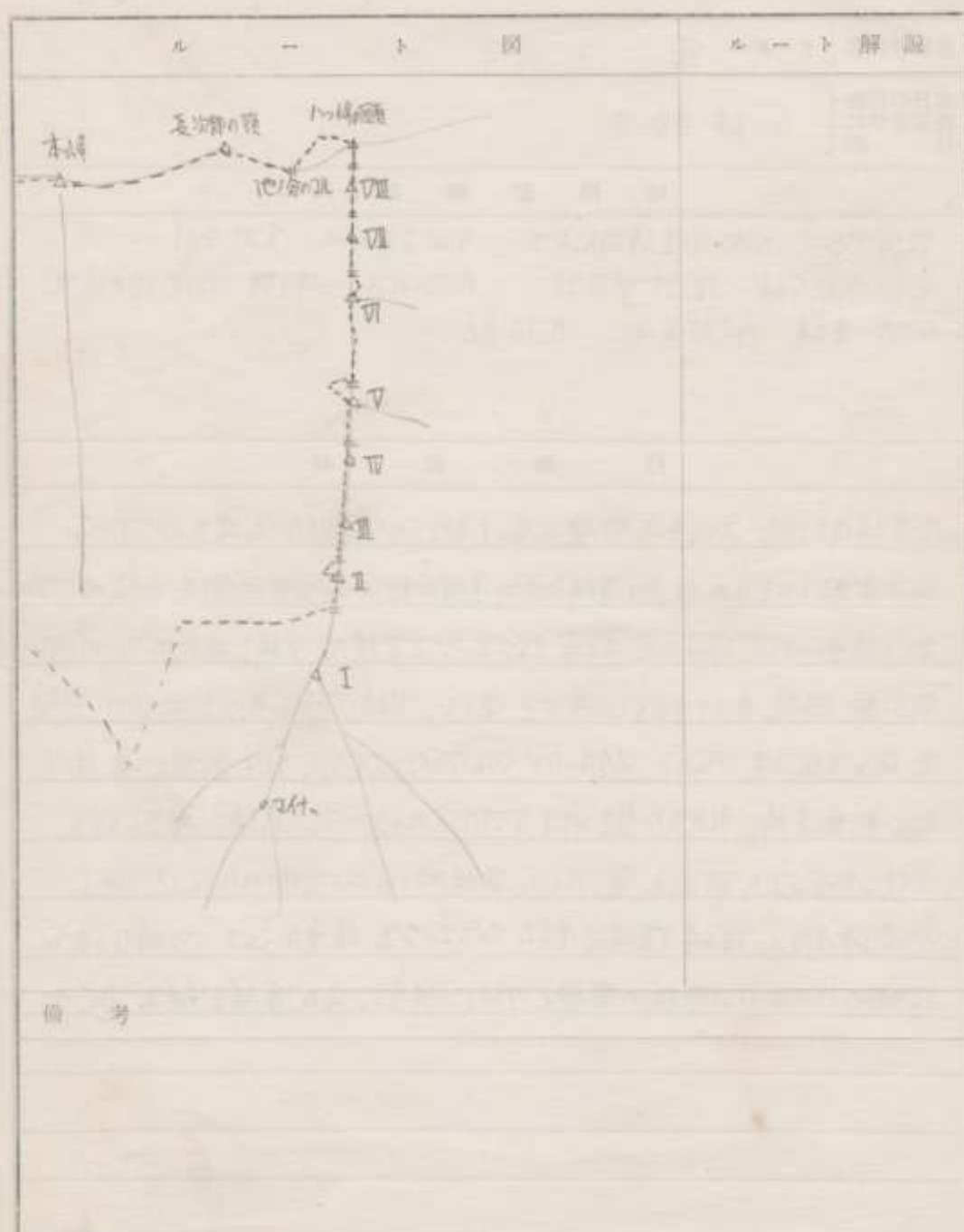
行動記録用紙

1999年 5月 3日

天候 晴

報告者 山本 圭郎

参加者氏名	リーダー 圭郎 山本
本日の行動概要並びに目的	ハッ峰 縦走
時間記録記入	
5:00 BC 5:50 I-II峰間にセ下 7:20 I-II峰コル 8:00 4峰 8:30~9:30 5峰 10:25 V頂コル 11:40~12:15 ハッ峰の頭 12:30 池の谷コル 13:25 本峰 14:30 崩剣 15:20 BC	
行動記録	
I-II峰間にセをさくしま雪壁となっており、ツケザリに高度を上げていく。 雪が安定しているため、慎重にI-II峰に上り、I-II峰の下は長次郎谷側をハイマツにつか なり慎重にクレンゲタウシ。おとすイェンをV峰へ。V峰下失行10-15mの暗洞 筒を約1時間。かき下ろすい景色を楽しむ。V峰の下は長次郎谷側の雪壁 を40mサイル2本つないで、スカット7・50mクレンゲタウシ、717 残雪ピンを使い 40m 懸垂下降。ヘルメットをはずしてV頂のコルへトランス。V頂へ登るころから アイゼンがタウシになりはじめる。V峰の下は三ノ谷側のハイマツをつか かりクレンゲタウシ。V頂 V頂はヤサシイイェンと慎重にこぎ、ハッ峰の頭へ。 池の谷のコルへは池の谷側の雪壁をクレンゲタウシ。おと本峰を経てBCへ。	

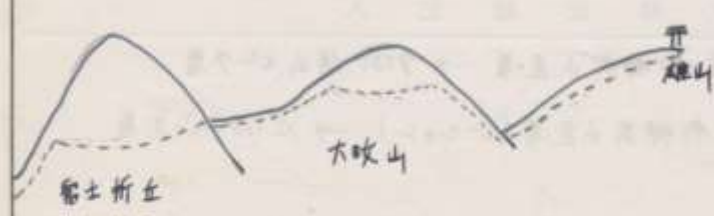


行 動 記 録 用 紙

お年 5月 3日 天候 要

報告者 西岡 進

参加者氏名	リーダー 三田 平士 , 青木 , 西岡
本日の行動概要並びに目的	アイゼンワーク士がねた アタック 立山三山
時 間 記 録 記 入	
5:35 バス発 → 6:25 創御前小屋着 → 9:00 雄山ピーク着 → 9:30 発 → 11:00 創御前小屋着 (レシオン) → 12:10 バス着	
行 動 記 録	
三田平士通らずに 創御前士トラスして 創御前小屋に着。 そのから 富士折立士へて 大吹山にかかるところでアイゼンがこわれた というアクシデント, それにゆえ強固にあって 雄山にはなかなか 着かなかった。雄山神社で村大のパーティーと出合い レシオンをかいいたいた。夜にカマイ。 帰りはアイゼンがこわれていたので慎重に下り、わりと案で あった。御前小屋からは 三田平士通り バスに着く。	

ル ー ト 図	ル ー ト 解 説
	
備 考	ピークでは天候が悪く期待していた富士山が見られず残念 逢くて寒いアタックであった！

行動記録用紙

53年 7月14日

天候 晴

報告者 今井

参加者氏名	リーダー 数内 昭博 今井 俊介
本日の行動概要並びに目的	ハッ峰マイトピーク東面スラブ
時間記録記入	
B.C 5:30 - 取付 6:35 - 登攀開始 8:40 終 11:20 - M.P 11:50/12:20 - B.C 5:40	
行動記録	
TTD-4は3天に登り、途中右岸の脆い岩場を越し、沢を降りて雪後の状態から非常に悪い状態、かなり前から壁に近づいてドラッグして東面スラブに入るつもりが、50m位でフッシュと脆い岩にはばたき、懸垂で余裕で降り、東面スラブの取付に達する。ハックの右端を登る時点、サキルはいい、フリクションのよくよくスラブをよつんばいで登るか、日光がまともに当たり、非常に暑い。トナールの下からルンバに入る。途中ルンバから出るはかだったか。スラブは暑いの2、涼しいルンバから出る気かせず、行を止まりおどろく。ニニ2も3い壁をトし登り右上る。ニニ2サキルを出たか、ローを打てる適当なリスがなく形だけの確保になった。さらにスラブに登り、マイトピークに達する。帰りはスラブの右側を懸垂10数回繰返し、ニニ2に降りるか、状態が悪いので、スラブに取付きさらに懸垂をし、取付いた地点に着く。ニニ28m位の雪梁の末端をカッティングで登ろうとしたところ、トナールをうちだしたとたん、そこから雪梁が大量雪と併に割れ、非常に怖い思いをした。	

その後、悪条件でニニ2を下り、B.Cへ。

ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説
ル ー ト 解 説	ル ー ト 解 説

行 動 記 録 用 紙

お年 7月 15日

天 候 ①

報告者 西岡

参加者氏名	リーダー 藪内, 今井, 森田, 西岡
本日の行動概要並びに目的	ハッ峰 (1.2峰間ルンゼより)
時 間 記 録 記 入	
6:00 - 8:35 - 10:15 - 11:10 - 11:25 - 1:00 - 2:00 B-C 五六ウゴル セーハウゴル ハッ峰ウ頭 レーヨン 長次郎ウ頭 剣岳峰 - 5:00 B-C	
行 動 記 録	
1.2峰間ルンゼをめぐって行くことが雪の状態が悪く 取付けないということでは5.6ウゴルから取付くことにした 6峰頭へは下降路を登り、7峰は岩もはっきりしていて 登り易く、8峰はまき道がつびていて、そこに登むことにした がまき道の取付 近くに大きな雪喉が成っていて、そこに注意し て渡す。ハッ峰頭へは1回懸垂下降し、そこから戻った道 を進む。長次郎ウ頭まで、剣岳本峰で源次郎隊と出合い 長次郎雪喉を下丁からそこで1年生の未熟さがハッキリ表われ ない気がした。	

前

5. 5. 1. 5. 2. 5. 3. 5. 4. 5. 5. 5. 6. 5. 7. 5. 8. 5. 9. 5. 10. 5. 11. 5. 12. 5. 13. 5. 14. 5. 15. 5. 16. 5. 17. 5. 18. 5. 19. 5. 20. 5. 21. 5. 22. 5. 23. 5. 24. 5. 25. 5. 26. 5. 27. 5. 28. 5. 29. 5. 30. 5. 31. 5. 32. 5. 33. 5. 34. 5. 35. 5. 36. 5. 37. 5. 38. 5. 39. 5. 40. 5. 41. 5. 42. 5. 43. 5. 44. 5. 45. 5. 46. 5. 47. 5. 48. 5. 49. 5. 50. 5. 51. 5. 52. 5. 53. 5. 54. 5. 55. 5. 56. 5. 57. 5. 58. 5. 59. 5. 60. 5. 61. 5. 62. 5. 63. 5. 64. 5. 65. 5. 66. 5. 67. 5. 68. 5. 69. 5. 70. 5. 71. 5. 72. 5. 73. 5. 74. 5. 75. 5. 76. 5. 77. 5. 78. 5. 79. 5. 80. 5. 81. 5. 82. 5. 83. 5. 84. 5. 85. 5. 86. 5. 87. 5. 88. 5. 89. 5. 90. 5. 91. 5. 92. 5. 93. 5. 94. 5. 95. 5. 96. 5. 97. 5. 98. 5. 99. 5. 100.

| ル
ー
ト
図 | ル
ー
ト
解
説 |
|------------------|-----------------------|
| | |
| <p>備考</p> | |

行 動 記 録 用 紙

S53年 7月14日

天 候 ○→◎

報告者 川 野

参加者氏名 リーダー 栗(3) 川野(2)

本日の行動
概要並びに
目的

早日尾根毛勝谷

時 間 記 録 記 入

B.C 5:00 → 平蔵谷出谷 5:50 → 剣沢小屋 7:00 →
御前小屋 7:55 → 室堂乗越 8:50 → 東大谷出谷 12:50
→ 毛勝谷出谷 13:30 → B.S 13:50

行 動 記 録

B.Cより御前を経て室堂乗越へ向う。乗越では立山川への降り口がわからず捜
い回る。たもとでかなり急な雪渓を下る。アイゼンを付けて下るがタンゴになり下りにく
い。東大谷出谷前のゴルジュまでは快適であるが、ゴルジュでは雪渓が割れていて
とても気味が悪い。ザイルを付け慎重に渡る。東大谷は去年よりもかなり水量が多くなり
石伝いで渡る。毛勝谷出谷まで巨石のゴロゴロした河原を行く途中、ヤスの切れ
向から毛勝谷上部の脆そうな岩壁群が見え、その物凄さに驚く。出谷からたまた
ま砂地で本日はビバケ。しかし時間がまだ早なのでサレ谷出谷付近まで偵察に出る。
雪渓の状態は非常に良い。

| ル | 一 | ト | 図 | ル | 一 | ト | 解 | 説 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | |
| 備 | 考 | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

行 動 記 録 用 紙

553 年 7 月 15 日

天 候 ① → ②

報告者

| | |
|--|------|
| 参加者氏名 | リーダー |
| 本日の行動概要並びに目的 | |
| 時 間 記 録 記 入 | |
| <p>B.S 5:00 → サビ谷出合 5:35 → ニ俣 7:50 →
 氷尾根取付 14:00 → B.S 19:30</p> | |
| 行 動 記 録 | |
| <p>B.Sよりアセンを付け出発。サビ谷出合まで快調に進む。サビ谷は、上部で雪溪が多く荒達している。サビ谷出合からは雪溪も大きく深くなり、アセンを利かて登る。雪のEにはたくまの石がのっている。右に岩塔を見てしばらく行くとニ俣である。ここで全て滝は雪の下で別に問題はない。ニ俣からは深く切れ込みとても暗い感じのする左俣と見たが広く雪溪が荒達している右俣が対照的であることがわかる。左俣の入口には、落差15~20mの滝があり細い糸のような水を落とし雪溪が大きく口を開けている。そのため直接行けないので右俣を迂回り氷尾根末端の小さな浅ルンゼに取付を左俣に降りようとすがこのルンゼ草付が良く苦痛する。尾根に出てからは猛烈なBush潜走のあと篠簞が現れ氷とたどる。氷行くと岩にふつかりBushを掴んでバース気味に下る。下降果がいっこうに見つからず何度も便所にはたあと20m 2回の懸垂で谷底へ降り立つ。この峰へつちげているルンゼからの落石が頻繁で無意味だ。雪溪の下をぐり抜け右岸(三尾根側)を迂回りL-ラインを捉える。謹かに交通が入る。この四りからガスがわがてきて、その切れ目が幻状態の悪い雪溪と両岸の巨大なホロホロの壁が圧倒的で</p> | |

ル　ー　ト　図

ル　ー　ト　解　説

ある。カズの切れ向を抜て行くことにする。右岸を浮石に氣を付け出合が
2つ目と思われし滝をトラバース気味に登り雪溪に立つ。これを行くと
また切れ向で右岸から入る。ここもまた浮石が多くとても緊張する。40m
一杯で次の雪溪に降り立つ。さらにこれを行くと左岸へ約80cm程で
厚さ4~50cmのスノーブリックがトラバースにかかっている。度胸一発でそこへ
飛び移り3m程岩に登り外傾トラバースで休む。この時である。突然、次に
飛びかかろうとしていた厚さ5cm長さ20m程の雪溪が崩れ、しばらく言葉も
出なかった。このため切れ口が雪壁となり前へ進めなくなる。左岸へ、

バントを伝って登り上部へ慎重に出るがどうしても雪溪に移れないのでオニ尾
根へつたいている脆いルンゼに登ることになる。1P目は、先のバントのトラバース

から脆いルンゼの岩登りでBush帯に入る。所々、かぶり気味の所がある。

2P目 20m程の登りでBush帯を抜け大いなトラバースに出る。3P目、このトラバース
の上は、かぶり気味の壁を強引に登ると2~3mの垂壁に出会い、左
右どちらからも突破できないのでホルト2本で切り抜ける。

このピンチだけで2時間程かかり、丘に出た時は、日没で急な斜面に
ハーケンを打ち体を固定してのピンバグとなる。

備　考

行 動 記 録 用 紙

年 7月16日

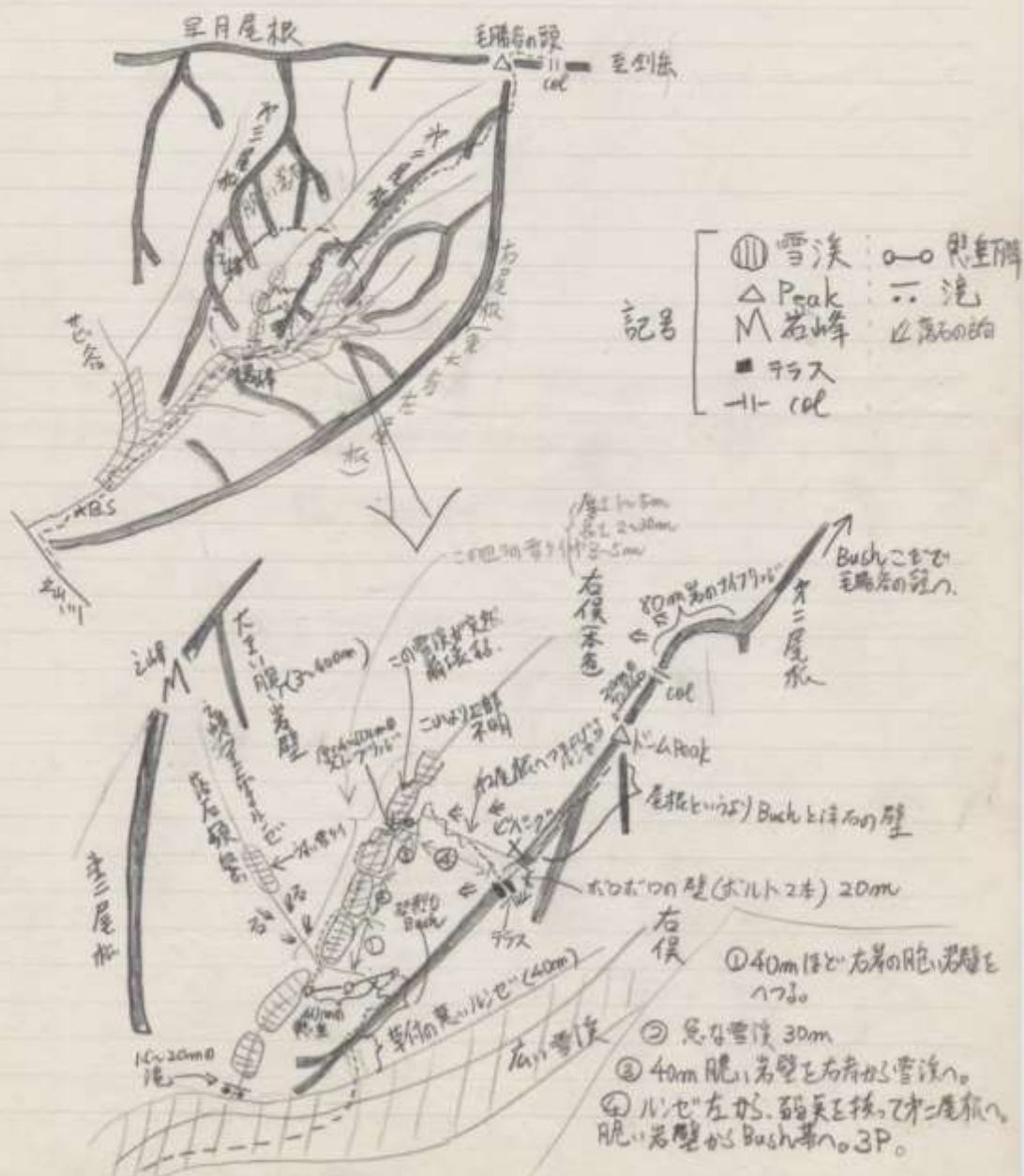
天 候 ① → ② → ③ 報告者

| | |
|---|------|
| 参加者氏名 | リーダー |
| 本日の行動
概要並びに
目的 | |
| 時 間 記 録 記 入 | |
| <p>B.S 5:30 → ドム Peak 6:30 → ドム下のcol 7:00 →
毛勝谷の頭 12:10 → 剣岳 14:55 → 長次郎のcol 16:00 →
B.C 17:50</p> | |
| 行 動 記 録 | |
| <p>昨夜は余り寝れず睡眠不足だ。B.Sより水急な浮石の多いBush混りの岩登りである。ルートファインディングとサクに引かかるBushに苦められながらうんざりした頃、ひこりドムPeakに出る。カニ尾根はドムPeakでぶち上がった壁であり先程登ってきた所は下で全く見えない。ここに立つと三尾根の脆い大岩壁や左俣の雪溪がよく見える。が、いすれにせよかなり悪い。右俣もつめのルンゼはとれも思で脆く困難なようだ。Peakからは20mの懸垂でドム下のcolに降り立つ。colからは7~80m岩のナイフリッジが続く。左俣側がスッパリ切れていて右俣側をBushを掴んで行く。このあとは、急な斜面でうんざりするほどBush漕ぎが続く。瘦尾根やルンゼを抜けて行くと、毛勝谷の頭に出る。この少し下でガスの晴れを待っている馬向草ルンゼ隊と出会う。早月尾根に登り、本峰に立つが、本峰直下の雪溪で川野がネガれてB.C帰幕が遅れる。(使用ルンゼ6本(全て回収)、ボルト2本(残置))</p> | |

| ル ー ト 同 | ル ー ト 解 説 |
|---------|-----------|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |

備 考

毛勝右ルート図 (北川野)



行動記録用紙

53年 7月 15日

天候 ①㊦㊧

報告者 青木

| | |
|---|-------------------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 住友(3), 山本(2) 大膳(1) 青木(1) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 源治郎尾根を縦走し 利峰へ。長次郎谷を下る。 |
| 時間記録記入 | |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>B.C (6:22) — 尾根取付 (7:10) — 1山峰 (11:20) —
 2山峰 (12:30) — 盤尾終了 (12:10) — 剣ヶ峰 (12:12) —
 B.C (13:35)</p> </div> | |
| 行動記録 | |
| <p>剣ヶ峰に源治郎尾根の末端を目指して登る。尾根を二分する
 小エダ雪渓を登る。11:20 盤尾終了。先登者が先行パーティーが
 いる為、左へ回り込み、アツシ道を進むことにする。</p> <p>尾根のハナ根にて、浮石が非常に多いためアツシ道に入る。
 200ヤードでアツシ道に入る。踏み跡がしかりしている。</p> <p>11:20 1山峰のピーク。晴天の為、1山峰の山容も爽快である。</p> <p>2山峰への登りも川面調に進み、この日の核心部、約30m
 の盤尾。セリ点ほ鉄の棒がしかり岩に打ちこんである。</p> <p>盤尾終了が12:10。やはり、やや急な岩稜を約1時間進み
 とピークに達した。そこで1山峰隊と合流。</p> <p>長次郎雪渓の思ったより急で非常に慎重に下る。
 ガイルでフックして熊手岩まで下る。約3時間かけて
 B.Cへ。</p> | |

行動記錄用紙

53年 7月 16日

天候<49.8℃晴>

報告者 山本

| 参加者氏名 | リーダー 佐友 山本 | |
|---|--------------------|----------------------|
| 本日の行動概要並びに目的 | 東大谷左保 コマナヒカ | |
| 時 間 記 録 記 入 | | |
| 6:00 BC | 10:00 本峠 | 11:25 P2600
13:10 |
| 17:20 P2600 | 15:20 左保コナヒカ 500m下 | |
| 7:40 P2600 | 8:15 左保コナヒカ 300m | 8:30 左/左保コナ 10:05 本峠 |
| 12:00 BC | | |
| 行 動 記 録 | | |
| <p>長谷部会を登り、早月尾根を下降し、左保の2人入着くかガスが濃く、いざしく回復し、
 目を覚まし、ガスの晴れ間へ左保下りであることを確認し、下降を急ぐ。岩が不安定で、
 大が岩が下りをおさす。コナヒカ 100mほど下り、ガスの濃いところ、右側のツルミを登り、アサギン
 滝の下あたりで、スナタカ岩場が現れる。左保の要付までガスし、ハナツリ岩場アサ
 ガンに、不安定な岩が下りをおさす。ここから右のガレージを開き、おさすか、本日も不可
 左保は、左保のルンカより、大が岩が下りをおさす。ガスの晴れ間へ左保下りが見え、
 おさす下り、急降が現れる。コナヒカ 約500m付近で、下降を断念し、要付まで尾根
 まで登り、ハナツリをこえ、早月尾根に出る。2600mのピークまで下り、ピカピカ。
 翌日 左/左保と300mほど下り、様子を見ながら、ここからスナタカ下りをおさす。
 山 BCへ引き返す。</p> | | |

行 動 記 録 用 紙

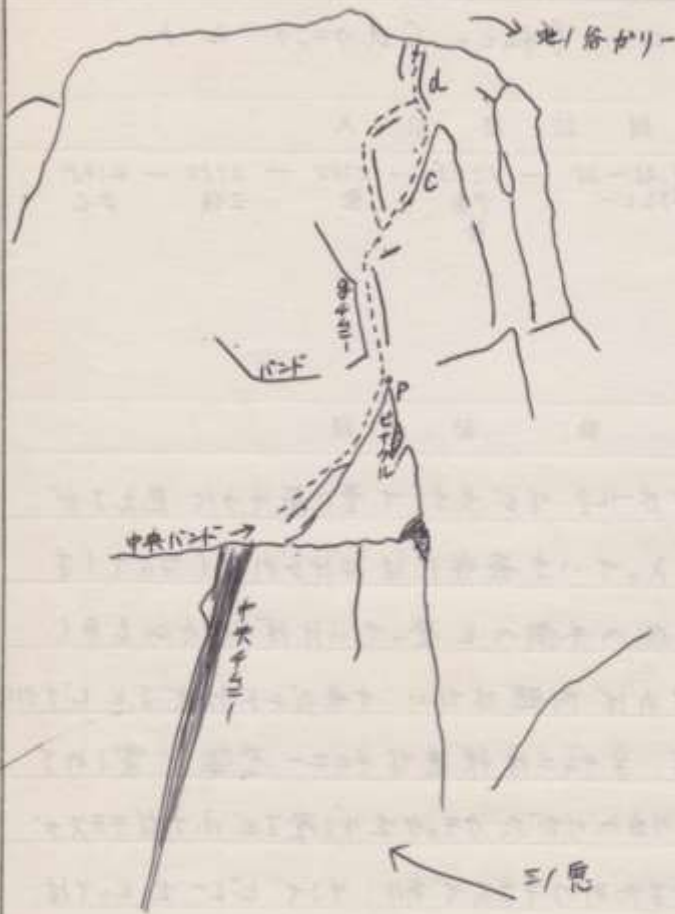
お年 7月 17日

天 候 ①

報告者

| | | | | | | | |
|---|-------------------------------|------------|------------------|-----------------|-----------|------------|-------------|
| 参加者氏名 | リーダー C.L 要. 森田. 西岡 | | | | | | |
| 本日の行動概要並びに目的 | チン木 中央千ムニ - 9千ムニ C d クラック ルート | | | | | | |
| 時 間 記 録 記 入 | | | | | | | |
| 5:10
B-C | 6:00
Z候 | 9:45
取付 | 11:25~35
1千ムニ | 1:25
P着
登 | 2:00
登 | 3:50
Z候 | 4:45
B-C |
| 行 動 記 録 | | | | | | | |
| <p>中央千ムニは中央の方をホールドなど大きくて登り易そうに見えるが登るにつれて中へ中へと入っていき最後にはねけられなくなってしまうので右側のリッペを外側へ外側へと登っていったらハーケンも多く打っており落石に注意すれば問題はない。中央バンドに登るとビナクルまでは1-ザイルで行けた。9千ムニは快適な千ムニ登攀が楽しめるが千ムニをねけてから上の方へのびたクラックを少し登ると小さなテラスがあるがそこはEクラックを登るためのテラスであり、そこでビレーを止めてはCクラックに行く時、クライミングダカンとしなければいけないので少し下の右のテラスでビレーを止めると良い。ここはルートを間違え易いので要注意、Cクラックは1-ザイルで登り易く、dクラックは1ヶ所1ヶ所1ヶ所がありそこを越えると上部は石の階段のようなものだ。地1分ガリーへ下り 31登へ出て 終了。</p> | | | | | | | |

ル ー ト 図 解 説

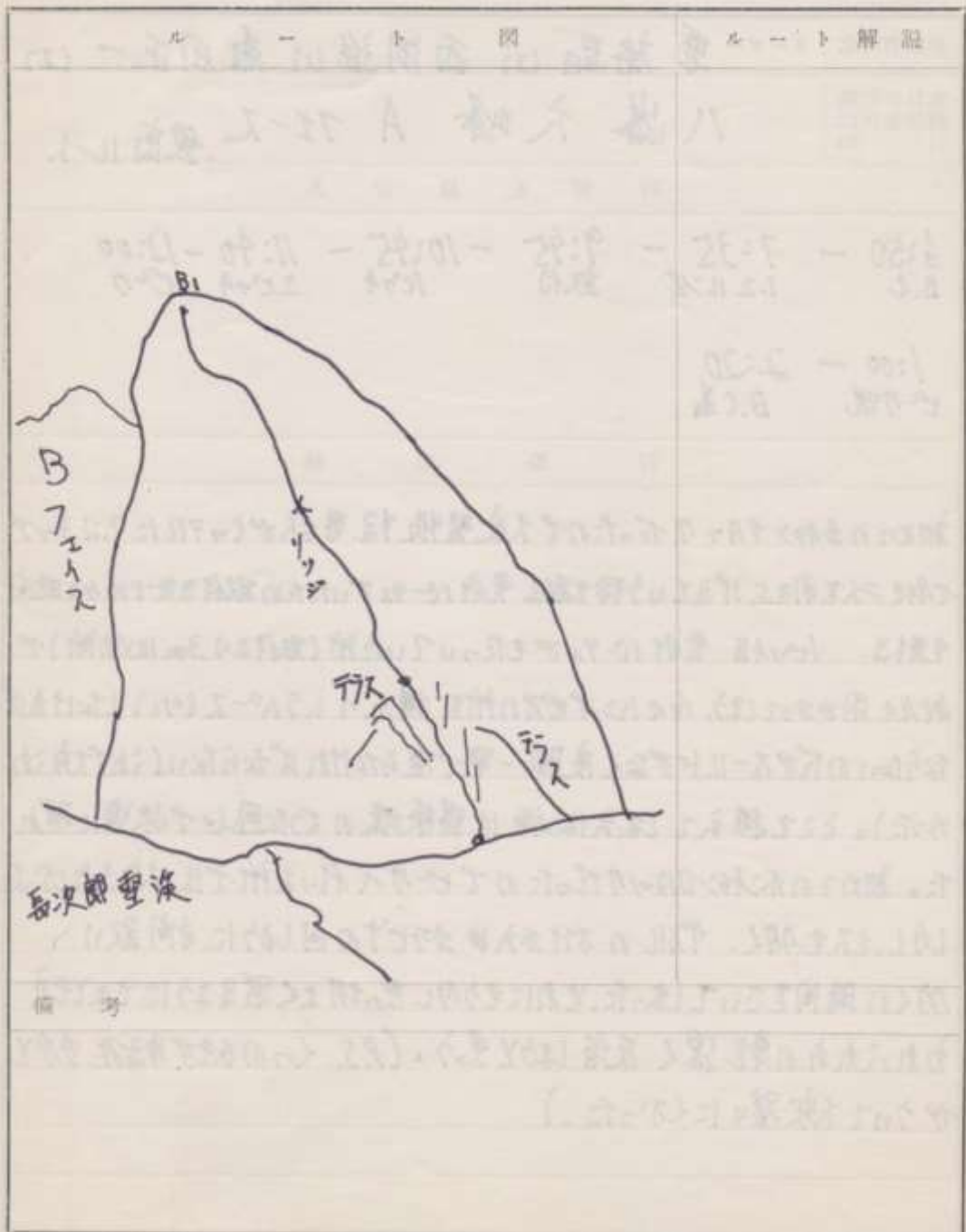


備 考

行 動 記 録 用 紙

53年 7 月 14 日 天 候 晴 → 雨 報告者 森 田

| | |
|--|--------------------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 栗 裕晶 (3) 西岡進 (1) 森田正一 (2) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 八 路 六 峰 A フェース 魚高ルエト |
| 時 間 記 録 記 入 | |
| 6:50 - 7:35 - 9:45 - 10:45 - 11:40 - 12:00 | B.C 1.2 ルンゼ 取付 ヒョウ ュビツク ビーク |
| 1:00 - 2:20 | ビーク B.C着 |
| 行 動 記 録 | |
| <p>初めてのホヤンアックだったので大変緊張する。要さんがミッテルに入りトフッ
 ンと二つ引き上げるといふ物を取る。先行パーティがいたため取付きまですに少々時間
 を取る。11:40 先行パーティがもたっている所(取付きより3mほどの所)で
 我々も引かかっている。少々ハンガゼオの所を横エイトラバース(ウレ)しなければ
 ならないのだがスールどがなく度胸一発で登らなければならない(これが大変こわ
 かった)。ここを越えてしまえば後は強襲隊のまな恩心で快適に登れ
 た。初めてのホヤンアックだったのでビークへ付いた所では大変うれしかった
 けれど、ミスも多く、ザイルのかけがえぬカラビナの回し方に時間取り
 ぬきの時間をさいてしまった。それにもう少し思切よく登るようにせよと言
 われにこれらの事を深く反省しようと思う。(P.S. くのいすがゆるみ、かがと
 がうけて大変登りにくかった。)</p> | |



行動記録用紙

553年 7月 20日

天候 ☉ → ☉

報告者 川野

参加者氏名 リーダー 住友(3), 川野(2)

本日の行動
概要並びに
目的

4ンネ = 4レIG-C-D

時間記録記入

B.C 5:45 → 二俣 6:10 (7:10) → チンネ下インセル 8:40 →
取付 9:30 → 登攀開始 9:40 → 中央バンド 11:30 (12:15)
→ 登攀終了 13:00 (13:45) → 三窓 14:05 (14:15) →
二俣 15:05 (15:20) → B.C 15:55

行動記録

三窓直下でルートをよく見てから取付く。下部は片危...岩で木口木口
だ。取付がめんどろ苦労する。1P目 30m 岩が所々ある4mニールから右の
リッジに登り、テラスに出て直上するクラックを強引に登り4mニール下でビレー。30m
2P目 4mニールを20m。3P目 連打されているビンに掛かれ、アブミ
を使い、20m 登った小エースタンスでビレー。4P目 凹角の15mの登り
で中央バンドへ。ここからピナクルの裏を過ってG4mニールへ。5P目 ホル
ドスタンスのいかりしたG4mニールを1m直に登り右にトラバースして、バンド
に出てビレー。6P目 4mニールがクラックかわからず割れ目の登攀で
高度感を楽しみながら登るとチンネの頭である。

| ル　　ー　　ト　　図 | ル　ー　ト　解　説 |
|------------|-----------|
| | |
| 備　考 | |
| | |

行 動 記 録 用 紙

お 年 7 月 21 日 天 候 ①

報告者

| | | | | |
|---|-----------------------------|--------------------------------|--------------------------------------|--|
| 参加者氏名 | リーダー CL 藪内 青木 西岡 | | | |
| 本日の行動
概要並びに
目的 | 11ヶ峰 6峰 Cフェイス RCCルート | | | |
| 時 間 記 録 記 入 | | | | |
| 6:15 - 7:12
B.L 1.2峰内にて前 | 8:30 - 9:30
取付
(時肉待ち) | 9:45 - 10:25
1ピッチ
(時肉待ち) | 10:45 - 11:10
2ピッチ 3ピッチ
(時肉待ち) | |
| 12:00 - 12:40
P.座 | 2:00
B.L | | | |
| 行 動 記 録 | | | | |
| <p>取付から1ピッチ目は傾斜もゆるやかで登り易く、2ピッチ目の
取付土少しいた所は傾斜も急で岩もこまかい所があり慎重に登
り、2ピッチ目のビレー点は先行パーティーがつまっていたので
不気味な所でとらさずをえなく登っていました。</p> <p>3ピッチ目からは傾斜もゆるやかになり、4ピッチ目はビレーを
ファスナーでとろうとしたがザイルが足りずまた不気味な体勢を
とっていました。下降路を下り、5.6のゴルからかりず夏道を
下り長吹峠雪原に出た。</p> | | | | |

行 動 記 録 用 紙

53 年 7 月 21 日

天 候 晴

報告者 今井

| | |
|--|----------------------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 住友 - 川野 山本 - 今井 |
| 本日の行動概要並びに目的 | ハッ峰 六峰 Aコース 中大ルート
時 間 記 録 記 入 |
| 取付 (15:00) - 終 (16:40) - 出 (18:05) | |
| 行 動 記 録 | |
| <p>下から見ていて安易そうに思えたのでトップで登ることにしたが、大きな誤算だった。10mくらいは快適だったか、4mニに入り込み汗をかいたころから不快になってきた。その後はホールドがこまかいのでハーケンをたよりのつっぱりで登る。まさに完全なADの状態が30m続いた。少々いやになったが、適当なビレイ点がないためセカントに7-8m上りてもう一回つっぱりで登る。ここではいかに松にビレイをする。2ピッチ目ははい松のリッパで急上昇でいく。40mはいはいでAの頂に出た。</p> <p>※ Aの頂と中間のビレイ点との互いの声か聞こえず二人とも20分程 となりあっていたため声かかれてしまった。下にはいたパーティーは2人の声か聞こえず不思議に思ったそう。</p> | |

| ル ー ト 図 | ル ー ト 解 説 |
|--|---|
|  | <p>↑ 四角
40m フォース</p> <p>↓</p> <p>↑ 4.6 = 1
40m 73-7</p> <p>↓ 6m</p> |
| 備 考 | |

行動記錄用紙

55年 9月 21日

天候 晴

報告者 小笠

| | |
|--|---------------------------------|
| 参加者氏名 | ローダー 恒万 川野 幸男 山本 |
| 本日の行動概要並びに目的 | ハッ峰六峰Dコース 富山大ルート |
| 時 間 記 録 記 入 | |
| 6:15 BC | 8:30 Cコース下へ入る 10:00 取付 12:55 終る |
| 行 動 記 録 | |
| シュバルト下0.1kmにはテラスを左へ折る 万歩りまで20の岩を10分登る。3分右の
凹角へ入り、3分つめる。凹角上部は、ハッ峰ルートが合流しており、直上へ登る。
中央ハッ峰へ出る。ここは 左上げと快急なリッジとなり、再び傾斜が急な
六峰頂上へ。 | |

加 田 製 菓 店

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説



備 考

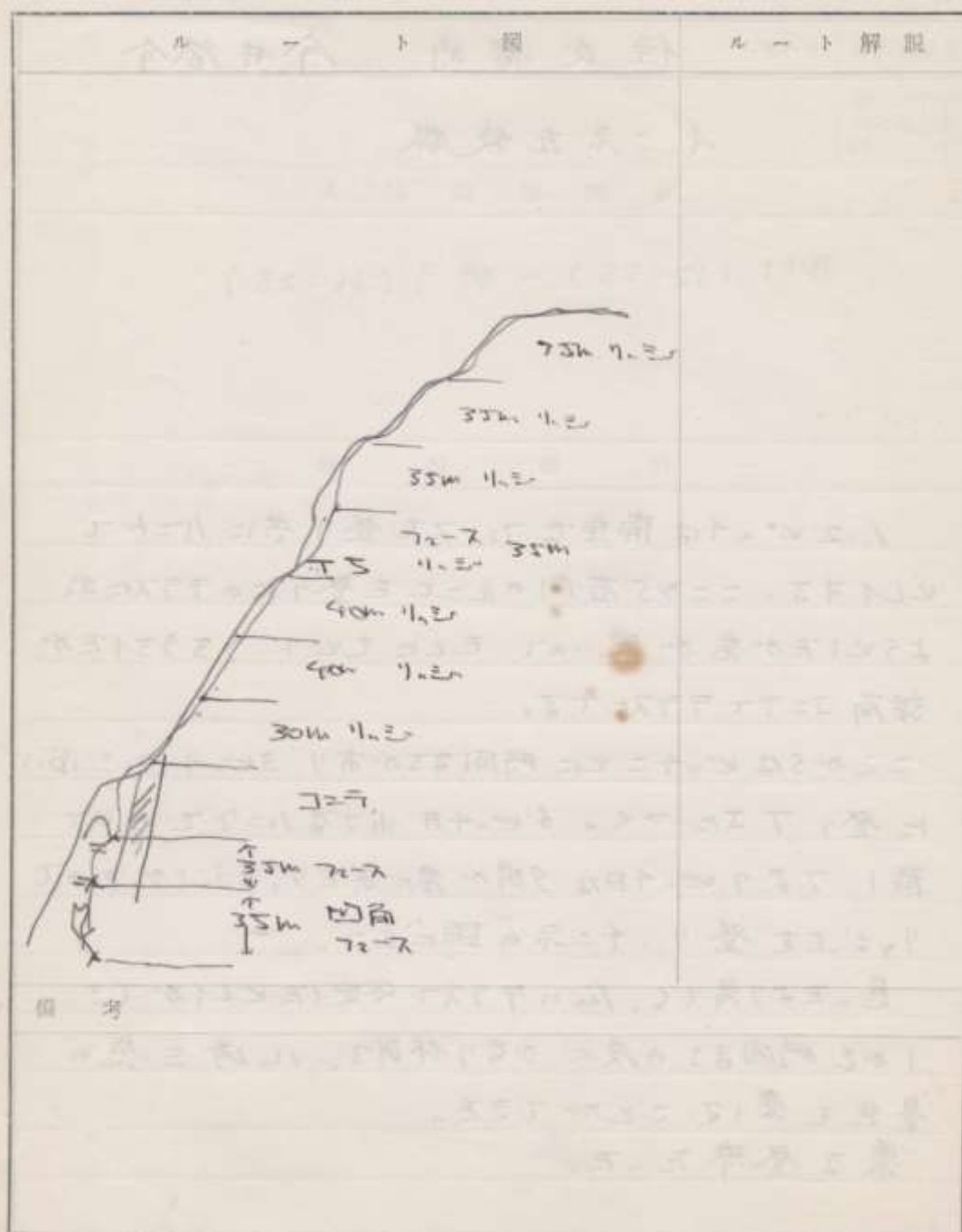
行動記録用紙

53 年 7 月 23 日

天候 晴

報告者 今井

| | |
|---|------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 住友 健時 今井 裕介 |
| 本日の行動概要並びに目的 | 千代ネ左岐線 |
| 時間記録記入 | |
| 取付 (12:55) - 終了 (16:25) | |
| 行動記録 | |
| <p>1. 2 ピークは簡単なフェースに登り共にハントで
 ヒイする。ここから右側のルートを登り上のテラスに出
 ようとしたが岩が脆いので もとにもどり うろうろしたか
 結局 コにてテラスにでる。</p> <p>ここからは ピークごとに 時間差があり 3 ピーク リミット
 に登り下したつく。6 ピーク目 小さなハントを AO で
 越し 7. 8. 9 ピーク目は 夕陽が岩にあたり、まぶしからたので
 リミットに登り 千代ネの頭に立つ。</p> <p>思ってたより暑く、広いテラスで安定したヒイができ
 1 かも 時間差の度に かなり休めて、11. 峰 三 郎の
 景色も楽しむことができた。</p> <p>楽しい登攀だった。</p> | |



行 動 記 録 用 紙

53 年 7 月 23 日

天 候

①

報告者 教田

参加者氏名 リーダー C.L. 電 (3) 山本 (2) 西 風 (1) 青 木 (1) 大 膳 (1) 教田 (2)
 本日の行動概要並びに目的 北方 緩 線.

時 間 記 録 記 入

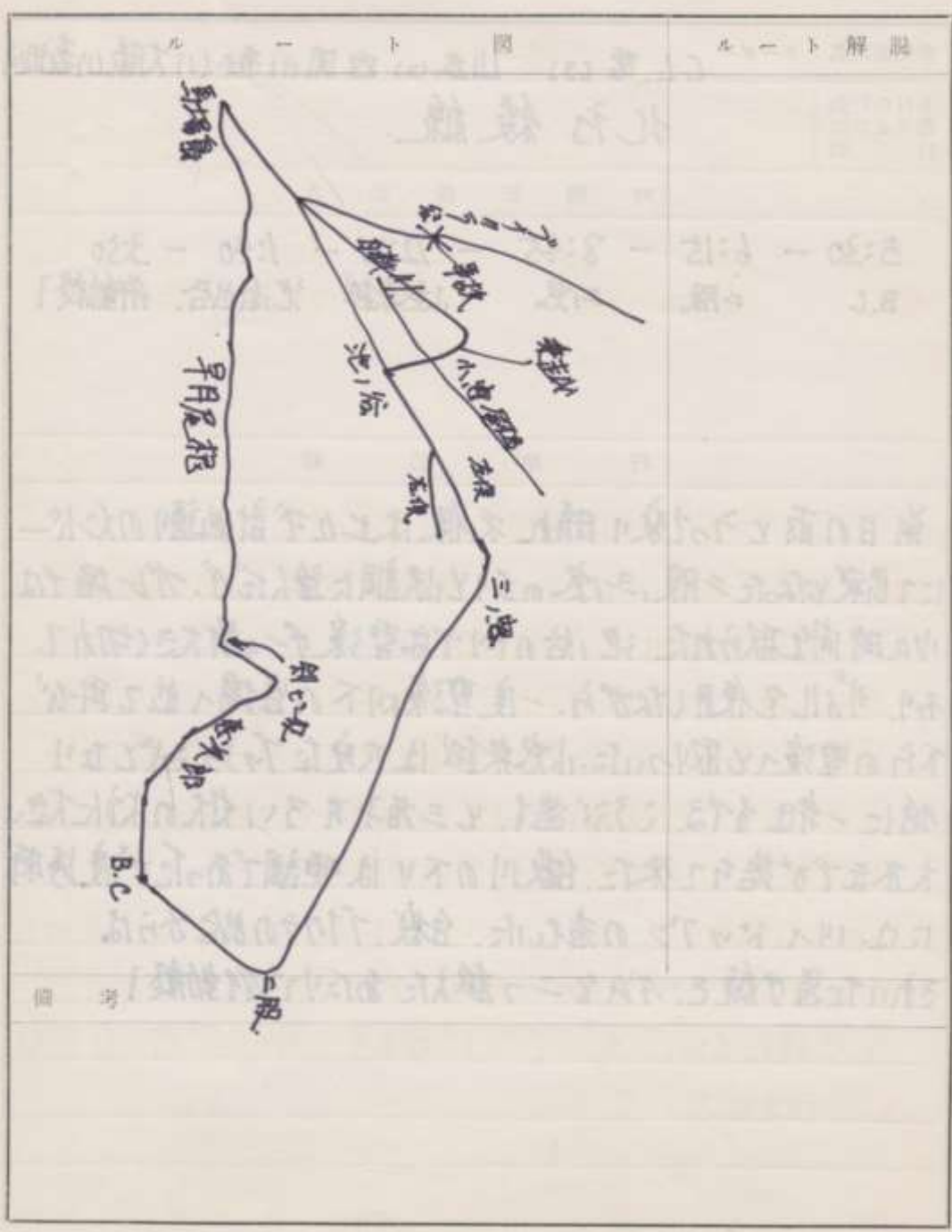
5:30 - 6:15 - 8:45 - 12:20 - 1:40 - 3:50
 B.C = 股 ニ 忠 小 忠 衆 越 池 谷 出 合 作 動 終 了

行 動 記 録

前日の雨とラって夜明け晴れ。天候は上々で計画通りのメンバーにて出発となったニ股、三木の寺とほぼ同時に進んだが。ガレ場では少々時間を取られた。池谷の下りでは雪渓ガレ場所大きく切れており。ザイルを使用しながら、一度雪渓下の岩場へ出て再び下りの雪渓と取りついた。小忠衆越は大変なブッシュミギとなり。特に一年はもつる。こぶが落ち、と三指子もろいおたのように大きい大木までが落ちて来た。自敷川の下りは順調であったが渡渉時には、川へドッパンの者もいた。自敷、ブイクラの出合からはきれいな道が続き。谷Aを二つ越えたあたりで作動終了。

三ノ下ノ解

三ノ下ノ解



行動記録用紙

年 7 月 24 日

天候 ①

報告者

| | | |
|--|----------------|----------------------------------|
| 参加者氏名 | リーダー | 同上 |
| 本日の行動概要並びに目的 | | 同上 |
| 時 間 記 録 記 入 | | |
| 4:25 出発. | 5:15 事故発生 → 出発 | 6:20 馬場島荘 → 出発 3:00 3:10 飯川ビバーク地 |
| 行 動 記 録 | | |
| <p>・ プナウ谷 1140m 地点にて事故発生.</p> <p>事故: 西園サ岩端にてスリップ。前頭部強打。一時意識不明
口内より出血。(口内も強打)</p> <p>西園を横にならせ歩道をほどき馬場島へ下すことになり来た道を引き帰り。当人はあまり意識がはっきりとせず非常に不意であった。馬場島にて西園を満院へ行かせることに決定。馬場島荘にてお昼を備用。要さんと西園が土一へ。のこりの者は馬場島にて次 3:00頃二人が帰ってきたが別に異常はないとの事。のこりの者大変心配する。本日はこれ以上行動は無理のもうだったので馬場島より 10分ほど行った飯川谷にてビバーク。</p> | | |

① 第 一 章 概 論

| ル ー ト 問 | ル ー ト 解 説 |
|--|------------------|
| <p>1. 問</p> <p>第 一 章 概 論</p> | <p>第 一 章 概 論</p> |
| <p>問 題 1. 第 一 章 概 論</p> <p>第 一 章 概 論</p> | <p>第 一 章 概 論</p> |
| <p>第 一 章 概 論</p> <p>第 一 章 概 論</p> | <p>第 一 章 概 論</p> |
| <p>第 一 章 概 論</p> <p>第 一 章 概 論</p> | <p>第 一 章 概 論</p> |

行 動 記 録 用 紙

53年 7 月 25 日

天 候

①

報告者

参加者氏名 リーダー 同 上

本日の行動
概要並びに
目的 同 上

時 間 記 録 記 入

4:40 - 4:45 - 8:55 - 12:50 - 1:40 - 2:45
出発 早取付 佐蔵小屋 ピーク 長次郎の山 B.C

行 動 記 録

早取付というので一年は少々緊張だが、しかし山本さんゆかりとした一定のペースに張入まれて順調に登る。途中佐蔵小屋までのオーバーヒッターからバテる。後はピークまでバテながらも、みんな遅れることなく登りきり。長次郎雪渓では、表腹大膝がゆらゆら遅れるがペースには一同ついて着。

① 第 二 章 第 二 節

| ル ー ト 問 | ル ー ト 解 説 |
|--------------------|--------------------|
| <p>第 二 章 第 二 節</p> | <p>第 二 章 第 二 節</p> |
| <p>第 二 章 第 二 節</p> | <p>第 二 章 第 二 節</p> |
| <p>第 二 章 第 二 節</p> | <p>第 二 章 第 二 節</p> |
| <p>備 考</p> | <p>備 考</p> |

行動記録用紙

53 年 7 月 24 日

天候 晴山

報告者

今井

参加者氏名

リーダー

住友 健司

今井 格介

本日の行動
概要並びに
目的

池・谷 剣尾根 中央壁 トレート

時間 記録 記入

B.S (6:15) - 取付 (9:00) - 終 (13:50)

剣尾根 稜線 (14:50) - ミ・忠 (16:20)

行 動 記 録

三窓から池・谷尾根を回り込み R2 を登り、コルチオリ
途中 / 同懸垂を 1、ガラクラのみにこぶを降る。

取付から左の凹角に入、左側より入っていたので、フェースとの境目から
登ろうと 1 本かこれより上めたので何もないうちに両面を食って、た、結局
凹角に入りこれを直上 1 ルーペに等しいかたて下りて登る。11:7 の下で 11:7 にヤは
いねをたよって右にトラバースして下りて来る。2 ビュー目は 11:7 の右からフェ
ースを右にする。ここには突然フリーカーで下りて驚かされる。この少し後の不安定
なためここから 15m 程左上して少し休憩をとり、3 ビュー目は 10m 程入って
これよりフリー、小さな 11:7 をフリーで越え綱からフェースを登る。40m ほどい
て凹角の下に出、これを登ったところから少し休憩を食う。これより上は両面な
いと思われ、左側のためもう 1 ビューをサイルをつけたルーフからの下り終り

下りて、カシラで登り、剣尾根の稜線に出、長穴からの頭取で、三窓
に帰る。めずらしく下りて、カシラに帰る。

ル ー ト 解 説

10-15 聖丹中 野馬除 谷 口

40m 二ノ十ノ
72-ス

↑ 山崎
90m 72-ス
↓

↑ 15m 72-ス
↑

40m 72-ス
50m
↓

↑ 35m
山崎
↓ 72-ス

備考

行動記録用紙

53年 9月 26日

天候 晴

報告者 山本

| | |
|--|--|
| 参加者氏名 | リーダー 山本 |
| 本日の行動概要並びに目的 | 4:30 左下から左方から |
| 時間記録記入 | |
| 10:10 三ノ宮 | 10:55 取付 12:35 中央駅 13:30 中央駅 14:40 4:30 頂上 |
| 行動記録 | |
| <p>左方ルートを15分ほど登り左のルートを取らずに取付く。大畑の麓のルートを登ると大畑ルートを右側から登る。15分ほど登り右の方のルートに登る。大畑ルートを登ると再び左方ルートを登る。ルートを右より中央に下り出る。ここからは左方から左側の四角を10分登り、大畑の麓から下り出る。最初のルートから、少し登ると次のルート。ここからは右より、左側を下りて4:30 頂上へ。</p> | |

遊 田 展 望 圖 行

| ル ー ト 図 | ル ー ト 解 説 |
|--|-----------|
|  | |
| <p>備 考</p> | |

行 動 記 録 用 紙

S53年 7月26日

天 候 ○→○

報告者 川 野

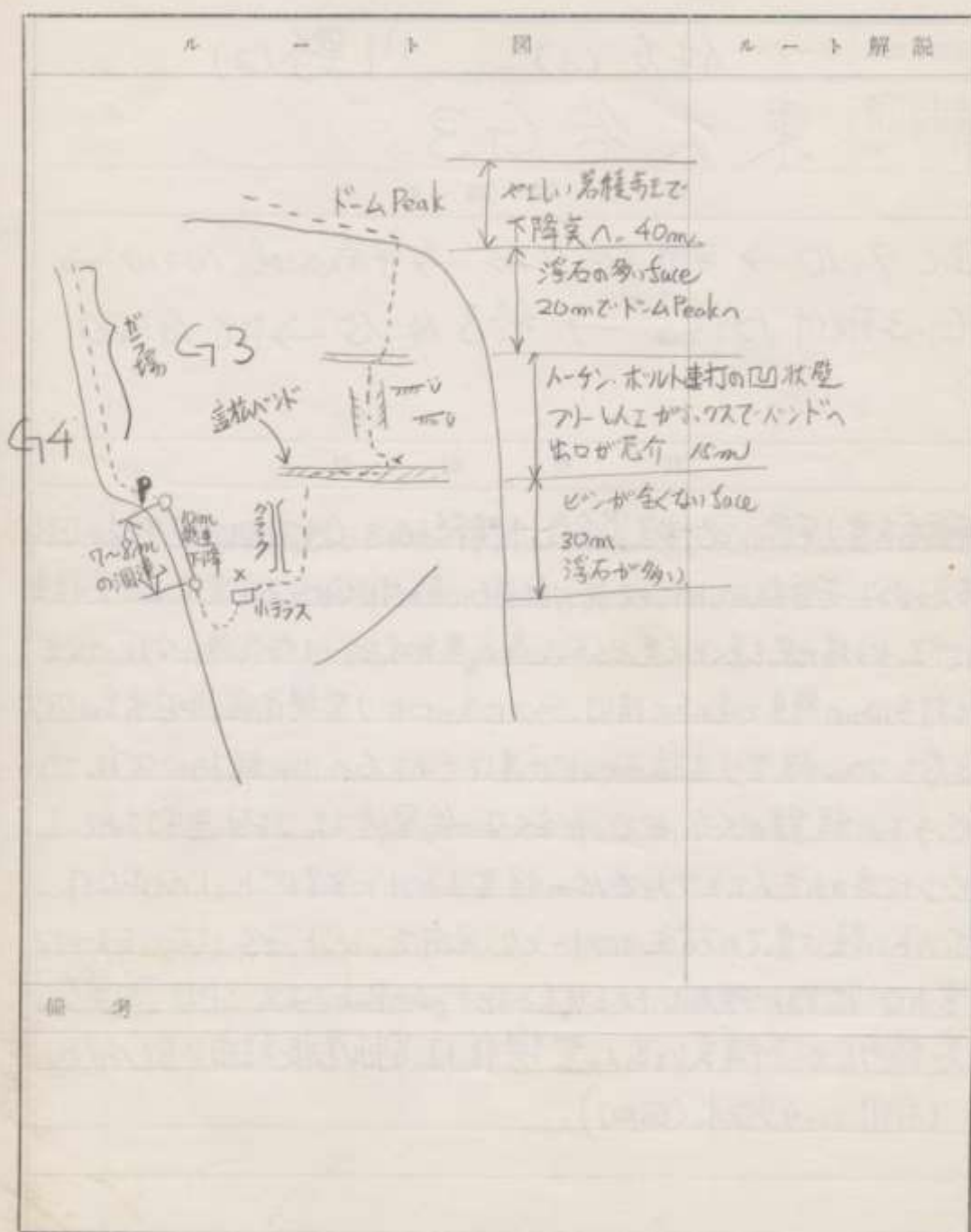
| | |
|--------------|-------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 住友(3) 川 野(2) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 東大谷 G-3 |

時 間 記 録 記 入

B.C 7:10 → 平蔵出発 7:55 → 平蔵の100 10:10 →
G-3 取付 12:45 → 終 3 14:15 → B.C 16:20

行 動 記 録

平蔵谷を登り、平蔵の100に出る。昼食後、下降路のG-3-G4間のルセを捜すがなかなか見つからず、苦勞する。このことを見かね、浮石に氣を付けながら、不安定なルセを慎重に下る。ガレ場に足を置く足元からトッと崩れ無氣味だ。もし行くも滝となりハーゲン本を打ち10mの懸垂で後の下に降りる。ラスに這り上がり登場開始。10目木を15m程の右を20m程登り、立松のバントに達してこれを右へ10m程トラバースする。このトラバース程難かしくないがピンが全くない為緊張する。2P目連打しているピンに導かれて人工フリーで15m程登りバントに出るが、バントへの出口は、ボルトの頭に来るの不安定なフリーとなり危介た。バントから浮石に氣を付けて登れば、踏踏が現われ、これを越えたとドームのPeakである。3P目 簡単な岩稜歩で下降突へ出る。登場後は、別山尾根経由でB.Cへと下る。
(使用 ハーゲン2本(回収))



行 動 記 録 用 紙

53年 7 月 29 日

天 候 晴

報告者 山 本

| | | |
|---|------------|---------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 妻 | 山 本 |
| 本日の行動
概要並びに
目的 | 池ノ谷右保奥壁トーム | |
| 時 間 記 録 記 入 | | |
| 5:00 三ノ宮 | 9:30 池ノ谷下 | 9:05 前付 14:15 剣尾根ノ頭 |
| 15:20 三ノ宮 | | |
| 行 動 記 録 | | |
| <p>池ノ谷を下り、右の草付のトームに登りスラック取付く。10mほど登るとハッキリ
 常の行方を知ることができ、右側の下へ行く。凹角内を登るかホールドか悩むが、
 凹角を10m登り左の岩の付いたトームを登る。ホールド出る。このホールドを右のトームに
 岩の付いたスラックを登る。上部のホールドを登るとハッキリホールド入り。コンチエンスでト
 ームをたどる。やがてハッキリ消え、右のトームになる。15分ほど登ると、右側の岩の付いた
 崩壊地へ出る。左のトームを登り再び右のトームへ出る。右の正角に剣尾根の頭が出る。
 右側の山頂のトームを登り、剣尾根へ出る。右の山頂の頭を登り三ノ宮へ</p> | | |

行動記錄用紙

53年7月28日

天候 晴

報告者 山本

| | | |
|---|-------------------------------|---|
| 参加者氏名 | リーダー 栗 | 山本 |
| 本日の行動概要並びに目的 | 源治郎尾根Ⅰ峰 平蔵谷側 中央ルゼへ 名古屋ルート | |
| 時 間 記 録 記 入 | | |
| 5:30 BC | 7:10 取付
9:50 中央バド
11:15 | 12:10 12ヶ下
13:00 14:45 I峰頂上
15:20 |
| 16:20 II峰北 17:10 BC | | |
| 行 動 記 録 | | |
| <p>平蔵雪道を下り中央ルゼの右サス大降った。ここからアタリに登り、左のトラース17ヶ下に入る。その内は岩と樹が林立した。右理村は4ヶ下で止まり、左に1ヶ下、4ヶ下のトラースまで、左のトラースを降り、右のトラースに登る。右理村は中央理村は左に1ヶ下のトラースまで、左のトラースを出る。このトラースは3ヶ下分かれ、左のトラース2ヶ下登り、右のトラース1ヶ下、中央のトラースに入る。次に理村は15ヶ下のトラース、右岸に10ヶ下登り、外側のトラースに左のトラース17ヶ下登る。これはフィニッシュポイントで、ここから中央バドに入る。このトラースの間隔約5m。上部フィニッシュは四角いバド目して凹形登りが容易な斜面を作る。バド下の奥にはトラース再び出現する。ここからバド直下右のトラース17ヶ下の左角まで進む。右のバドの下は右のトラース17ヶ下の右側に登る。右のトラースは3ヶ下の高尾尾を越え、剣先が見える。40mほど登ると右のトラースに入り、右の奥まで入り、右の奥まで上るとI峰頂上。</p> <p>I峰頂上からII峰までの距離約1km。平蔵谷側の降は比較的少ない状態か悪く、I峰のトラースは5ヶ下分かれ、</p> | | |

三 田 嶺 道 途 程

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説



備 考

行動記録用紙

年 1 月 25 日

天候

報告者 今井

| | |
|--------------|------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 萩内(3) 今井(2) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 小黒部谷 - 1 |
| 時間記録記入 | |

B.S 7:00 - 大窓 13:00 - 白萩・赤川河口 18:00

B.S 7:00 - 7775 12:45 - 小黒部出合 17:20

①1日目

行 動 記 録

三窓から出発。非常に暑い。小窓からの登りの途中前後に2つの冬山テボを見つけこれを回収した。しかし、あまり取りずめでザクがふられ疲れてきたのでこのままでは「谷欠はりにん」のたええになりかねないと思い一部を捨てる。赤ハゲからの下りで踏み跡からそれ苦労する。赤ハゲ、白萩間のコルに池がありビバーク。

②2日目

赤谷山からの下りのアジにはいやになった。フナクラでトシを食の折尾谷に入る。上部は雪渓が残っており途中からゴロになる。下ると水量が増え幅10m位の流れになる。右岸のアジ治川にふみあとががついていた。小黒部との出合は滝になっており右岸を上がった小黒部におりるここから河原治川30分ほど歩いてビバーク。

行 動 記 録 用 紙

年 7 月 24 日 天 候

報告者 今井

参加者氏名 リーダー 数内 昭博 今井 格介

本日の行動
概要並びに
目的 小、黒部谷 - 2

時 間 記 録 記 入

BS 6:30 - 赤谷川の氷の生合 7:30

ニ限 16:20 - 下流の生合 BS 19:30

行 動 記 録

3日目： 町近くの徒歩 3.4回を含め、広い河原を行く。右岸奥から白いおぬけが流れこむところから御前までは急激にせはまり徒歩もふえる。流れは突然雪渓にふせかれてその下も滝があらたいたため右岸を高登く。7:30が弱くおぬけをさがしてのり登る。雪渓2回でうしろ雪渓の上になり右岸につけてしっこにする。ここから1は5く右岸をのりあすに17登るか又滝があらたいた。この上に30m位雪渓がのっていたので又高登きをする。2000m登りトランス1数回の右岸2199mのピークから氷が入りにくいているニ限にあり。ここで右岸に取付き高登きトランスして雪渓で雪渓にあり1は5くそのとて奇くかこころこころありスリカントも数回おこした。あとはまた雪渓の上を登りつづけた。下りとは、下から平小屋の車上に見えている所で雪渓が切れてあり。ちょうど陽をくれてしまつたので進むことを止めて全回復してバーンする。

ル

ル

| ル | ル |
|---|---|
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |
| ル | ル |

行 動 記 録 用 紙

年 7 月 27 日

天 候

報告者 今井

参加者氏名 リーダー 坂内 今井

本日の行動
概要並びに
目的 小黒御谷 - 3

時 間 記 録 記 入

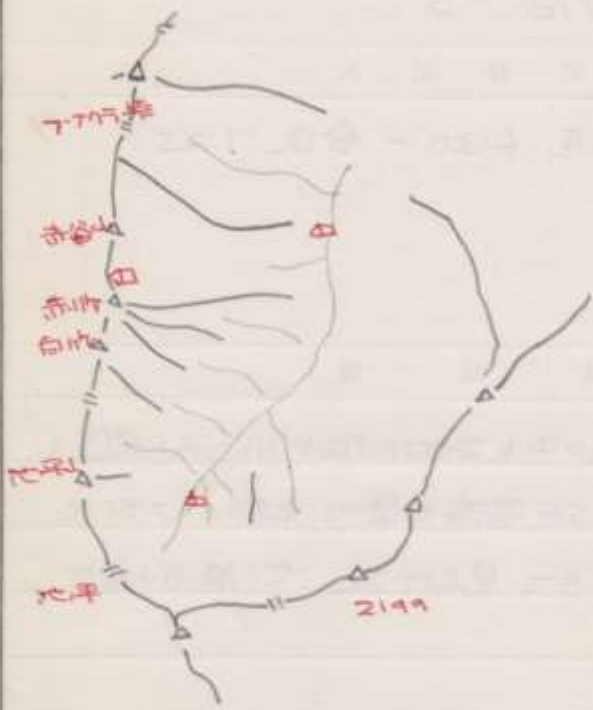
BS 5:10 - 池・千小屋 6:30 - 合流 7:25

行 動 記 録

4日目：右岸の7...ミユの中モ200m位トラバースし、先頭で
雪溪に降り、さきに雪渓に登り、赤岩の心こも
登りて頂上とて見上げると、池・谷の小黒が
目の前にいた。

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説



備 考

行動記録用紙

53年 7月 29日

天候 晴

報告者 山本

| | | |
|---|------------------|---------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 寺 | 山本 |
| 本日の行動概要並びに目的 | 渡辺郎尾根Ⅱ峰千蔵谷側 Dコース | |
| 時 間 記 録 記 入 | | |
| 5:50 BC | 9:45 取付 | 11:30 事故発生 12:50 取付 |
| 13:30 Ⅱ峰頂上 | 15:20 BC | |
| 行 動 記 録 | | |
| <p>長次郎谷よりⅡ峰の2カ所へ登り、取付より下降してDコースがけを登り、取付より右に左に登る。</p> <p>カニ尾根より逆風のストライプ20m登り、ハゲ下の頂上を登る。このあたりは木が少なく、石が少なく、ハゲの石が少なく、1人が何となく登る。ストライプを確保する。このあたりは木が少なく、石が少なく、ハゲの石が少なく、1人が何となく登る。ストライプを確保する。</p> <p>15mほど登った所、ルークがけ、ルークの頂上、ルークの頂上、足首を骨折する。</p> <p>ザイルをすく（なから）確保まで降り、ザイルを回収し、20mアサイル。このあたりは木が少なく、石が少なく、ハゲの石が少なく、1人が何となく登る。ストライプを確保する。</p> <p>エーネバーの頂上、40mアサイル、2回取付、Ⅱ峰の2カ所へ登り、長次郎谷まで降り、BCへ引き返す。</p> | | |

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説



備 考

行動記録用紙

553年 7月31日

天候 ①

報告者 川野

参加者氏名 リーダー 佐友(3), 今井(2), 山本(2), 川野(2)

本日の行動概要並びに目的 分散合宿: 柳保谷廻行

時間記録記入

黒薙 13:45 → 二保 16:40

行動記録

富山で定着合宿の荷物を送り返し、昼前、富山電鉄で宇奈月へ向う。宇奈月から向一髪で電車に飛び乗り、途中黒薙駅で下車。ここで神奈川大山岳部の人と会う。台風7号接近のため柳保廻行とあきらめ下山するのだそうだ。天気図を見せようとする。そこで台風が来ている。我々は一応二保まで入ることにおき、暑中、中水左のトンネルに入り、50m程行くと電車がやってきて皆んな我を忘れて逃げる。このあと黒薙温泉へのトンネルがあり、それをたどり河原に降り、しがし軌道をまたぐのが正解とわかり、あわてて河原から軌道へむくトンネルをいくつか抜け、やがて林道となり大型トラックにも会い、さらに行くと小径に変わり、冬用トンネルをいくつか抜けると二保に着く。途中天気図をとる。夕方発電所に行くが水量は例年並みとのこと。

海用教習所

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説

備 考

行 動 記 録 用 紙

年 8 月 / 日

天 候 ○

報告者 川 野

参加者氏名 リーダー

本日の行動
概要並びに
目的

時 間 記 録 記 入

二俣

B.S 8:30 → 二俣 10:30

二俣 11:35 → 発電所 12:30 → 黒薙駅 13:00

行 動 記 録

B.Sから河原をかし行主。岩壁を慎重にのり、LSに行くとき、
岩壁に拒絶対岸。木としての徒労となる。腰が折れた。50m程
行くと手も岩壁に拒絶。この目で9:00と見たので天気図を早く
とつて台風7号が来そうなので下山と決定。来た道をもとる。
二俣でレジャーを振り黒薙駅目指す。暑い。黒薙駅から
電車に飛び乗り守奈月で解散となる。

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説

大 正 十 三 年 十 月

大 正 十 三 年 十 月

大 正 十 三 年 十 月

大 正 十 三 年 十 月

大 正 十 三 年 十 月

備 考

行動記録用紙

53年 7月 31日

天候 晴

報告者 大勝 規弘

| | |
|---|--|
| 参加者氏名 | リーダー 藪内 (34), 青木 (14), 大勝 (14), 森田 (24) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 縦走
雷鳥テント場 → 一越 → 龍王岳と鬼岳のフル → 鬼岳と獅子岳のフル → サラ峠
→ 五色ヶ原テント場 (本日の目的地) |
| 時 間 記 録 記 入 | |
| 7:05 雷鳥テント場出発 | 14:00 五色ヶ原ヒュッテ |
| 8:05 一越前 | 14:40 五色ヶ原テント場 |
| 9:00 一越 | |
| 10:25 龍王岳と鬼岳のフル | |
| 11:25 鬼岳と獅子岳のフル・レシオン | |
| 行 動 記 録 | |
| <p>雷鳥テント場から一越に通ずる観光客用の道路に出るまで、道の幅は狭く土の道が大半であった。状態は雪溶け水の為やや悪かった。一越に通じる観光用の道は幅も広く整っていた。その傾斜は急ではなかったが距離がかなり楽ではなかった。一越を過ると人は減り道は狭くなったが、レッキレした道であった。鬼岳と獅子岳のフルまでの2.3ヶ所は雪渓が残っていた。サラ峠ではくねくね曲った長い下り坂で砂利に足を取られ苦しんだ。五色ヶ原ヒュッテの午前登り坂は道の脇には草がある様な普通の道であったが、石の多い所もあり、その上急な斜面であったので距離が長く感じられ最も苦しかった。五色ヶ原テント場は水が豊富であった。全般的に道は一般縦走路で問題は無かったが台風の接近が危ぶまれ心配した。</p> | |

| ル　一　卜　図 | ル　一　卜　解　説 |
|--|-----------|
|  | |
| <p>備　考</p> | |

行 動 記 録 用 紙

53年 8月 1日

天 候 晴

報告者 大勝 規弘

| | |
|--|---|
| 参加者氏名 | リーダー 藪内(34), 青木(14), 大勝(14), 森田(24) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 縦走 本日の目的地: 二保
五色ヶ原テント場 → 川宮峠 → 平ノ渡り場 → 針ノ木川 → 事故発生 → ヒバーク地 |
| 時 間 記 録 記 入 | |
| 5:55 五色ヶ原テント場 | 14:15 事故発生 |
| 7:35 川宮峠 | ? ヒバーク地 |
| 9:00 平ノ渡り場 | |
| 11:05 針ノ木谷・レジャー | |
| 行 動 記 録 | |
| <p>五色ヶ原テント場から平ノ渡り場までは少し岩の多い道でそこから時々黒部湖が見えた。渡りを渡って針ノ木川伝いに上った。最初、針ノ木川伝いの道は砂でその後岩が多くなっていった。川の流れは急であった。道は途中から川から離れ、川伝いの山道になった。山道は所々下が水で濡れていた。また、木が道を塞いでいたり横切っていたりして進行の妨けになった。2,3ヶ所もろい所があったがそれ程問題は無かった。ただ常に藪内ちゃんから注意を受けていた。それから川原に出て大きな岩と岩とに木がカガツいて、そこを渡った時に森田がその木から落ちて頭を打った。事故現場は木を渡らなくても行ける所だったので残念だ。その後様子を見て事故現場から上流へ200m程の所でテントを張った。ヒバーク地は前にテントを張った形跡が少し、水場も近かった。</p> | |

海 根 経 緯 図

大 正 十 五 年 十 月 十 日 海 根 経 緯 図

| ル ー ト 一 図 | ル ー ト 解 説 |
|------------------|------------------|
| <p>海 根 経 緯 図</p> | <p>海 根 経 緯 図</p> |
| <p>海 根 経 緯 図</p> | <p>海 根 経 緯 図</p> |
| <p>海 根 経 緯 図</p> | <p>海 根 経 緯 図</p> |
| <p>海 根 経 緯 図</p> | <p>海 根 経 緯 図</p> |
| <p>備 考</p> | <p>備 考</p> |
| <p>海 根 経 緯 図</p> | <p>海 根 経 緯 図</p> |

行 動 記 録 用 紙

53年 8月 2日 天候 晴 雲

報告者 大勝 規弘

| | |
|--|---|
| 参加者氏名 | リーダー 藪内(34), 青木(14), 大勝(14), 森田(24) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 縦走 予定変更, 本山下山
ヒバーク地(ニ保オラズツ4班補) → 平ノ渡し場 → 黒部第4ダム → 大町 |
| 時 間 記 録 記 入 | |
| 6:10 | ヒバーク地 |
| 9:00 | 平ノ渡し場 |
| 15:15 | 黒部第4ダム |
| 15:33 | バス全車 |
| 16:30 | 大町 |
| 行 動 記 録 | |
| <p>森田を降すンとになり 黒部第4ダムからのトローリーバスを使って降すンとになった。
 昨日来た道を引返し、平ノ渡し場を渡って黒部第4ダムに直じ、旧道を行った。道は黒部湖にそった。お判り降りりつくない道だったが、一つの沢を越すのに奥の方までまかなければならなかったのと予想以上の時間を費やした。それに同じ様な沢の地形があったので精神的にも苦しかった。レカレ川には橋がかかっていたり危険な場所には、フックスや木などで安全策が講じられていたのと特に注意を払わなければならないような場所は無かった。大町へは、トローリーバス、タクシーを使い直接病院へ行った。</p> | |

地 理 解 説

全 国 地 理 解 説

全 国 地 理 解 説

全 国 地 理 解 説

| ル ー ト 図 | ル ー ト 解 説 |
|--------------------|--------------------|
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |
| <p>入 学 試 験 問 題</p> | <p>入 学 試 験 問 題</p> |

備 考

行 動 記 録 用 紙

53年 8月 3日

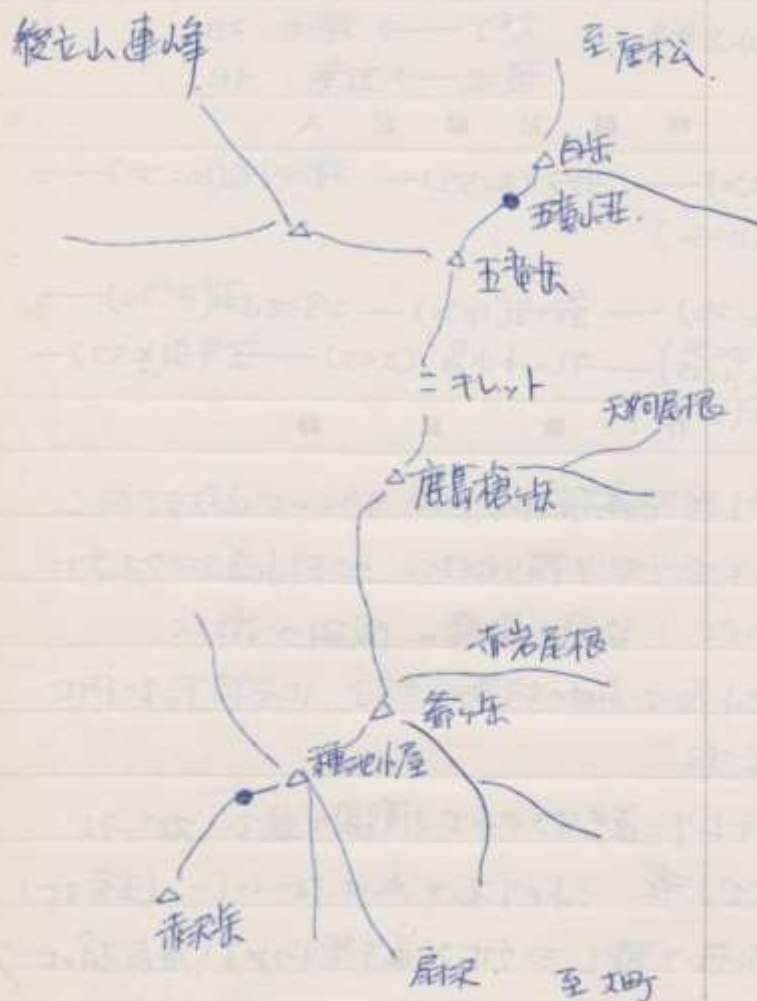
天 候 3a ● → ②
4a ③ → ① → ② ● 報告者

青 木

| | |
|--------------|--|
| 参加者氏名 | リーダー 藤内(3) 大膳(1) 青木(1) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 後立山系徒走 大町 → 種池 3日
種池 → 五竜 4日 |
| 時 間 記 録 記 入 | |
| 3日 | 大町(6:20) — 出合(6:55) — 種池小屋(10:50) —
ニト瑞(12:30) |
| 4日 | 種池(6:25) — 爺ヶ岳(7:30) — 二合池山荘(8:30) —
鹿島橋(10:50) — キレット小屋(12:45) — 五竜山荘(14:55) —
五竜山荘(14:55) |
| 動 記 録 | |
| 8月3日 | 2日 睡眠不足気味だが、ククニで出合まで行く。
降り止とボツボツ降り出した。ニ合山道でジグザグに
登っていく。台風の影響か、風雨が強くなる。
種池小屋で今日の行動は終了。10分程下、下、下。
暮管する。 |
| 8月4日 | 雨も上り、道もやややかで慎重に進む。スベッテ
冷池山荘。ニ合山道は水は少ない。(五竜で)
布引岳を越え、ジグザグ道を登っていると鹿島橋まで
急な下りにはスリッパを背負っているのが不安定に
なりやすく、肝を冷やす。キレットにははるかスリッパを
下りおり、慎重に進む。キレット小屋を通過、五竜へ。
やや岩積を進む。五竜の麓から雨が降り出し、
せりぬぐい下り、風雨と利で最悪であった。6:55五竜小屋に到着。 |

ル ー ト 図

ル ー ト 解 説



備 考

行動記録用紙

53年 8月 5日

天候

①

報告者

青下

| | |
|--------------|------------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 藤内(3) 大膳(1) 青下(1) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 後立山縦走 五竜山荘——天狗山荘. |

時間記録記入

五竜山荘(5:55)——レニョン(7:50
8:10)——唐松山荘(8:35
9:20)——
レニョン(11:07)——天狗山荘(14:40) 幕営.

行動記録

幕営地外に張られていたため、朝早くからテントを建て直し、朝食は唐松小屋の手前でレニョンを食べる。唐松小屋にて、天狗でテントを張るということを知り、一気に足をあげテントにする。唐松小屋より南峰へ、要場の不帰谷リに入る。鉄線階段、くさくさ、正真の小池、カマスにクマ背負、その下降は慎重を用い、ペースもダウン。急なカウ場を通り300m程登る、そしてやせた尾根を辿ると、やがて天狗平へ出る。このテント場は水場もよい、縦走中最高の場所である。

凡 一 卜 圖

凡 一 卜 解 脫

後山連峰

至白馬嶺

△ 柳子嶺

△ 鐘山

● 天狗坪

天狗溪

不歸溪

不歸劍

唐松溪

△ 唐松嶺

△ 白嶺

● 考

行 動 記 録 用 紙

53 年 8 月 6 日

天 候 ①

報告者 青木

| | |
|--------------|--------------------------|
| 参加者氏名 | リーダー 藤田(3) 天勝(11) 青木(11) |
| 本日の行動概要並びに目的 | 鈴ヶ山縦走 (天狗小屋→下山) |

時 間 記 録 記 入

天狗山荘(5:50) — 鈴ヶ岳(6:40) — 丸山(8:30)
 — 白馬山荘(8:50) — 白馬岳(9:20/9:50) — 三国境(10:20)
 小蓮華岳(10:55) — 白馬大池(12:00) — 天狗原(13:10)
 相池(13:55)

行 動 記 録

天狗山荘に下山 山とあって足どりも幾分軽い。

21号のハコブを越えてジグザグ道を進むと 鈴ヶ岳に立つ
 ニより白馬岳はもう目の前である。いよいよ峠という実感
 があった。

天狗山に登山者が多く列をなしている。杓子岳の中腹の
 ジグザグ道をたどる。少し下ると丸山への登りとなる
 ふもとにはテント場が見える。広いゆるやかな道を白馬岳へ
 9:20 遂にピークに立つ。こより下りばかりとなり
 小蓮華岳おろすと白馬大池がもう前に見える。
 白馬大池より乗鞍岳へは土間の岩がゴツゴツと続っており
 やや滑りやすかった。

天狗原から相池のおへとカゲ降りた。

1:55 相池のバス停へ。こよりバスで白馬駅まで解散となる。